

北見ワークショップ

高齢者グループリビングの成り立ちと作り方

慶應義塾大学総合政策学部教授

大江 守之

**高齢者グループリビングの
成り立ちと作り方**

大江 守之
土井原 奈津江

高齢者グループリビングの(私の)定義

- 生活支援サービスを地域から共同購入する高齢者の小規模集住形式
 - 生活支援サービス: 食事作りと共用空間の清掃等
 - 共同購入: 居住者が必要とする生活支援サービスを選択し共同で購入する
 - 地域から: 地域の主婦層がワーカーズ・コレクティブなどをつくって食事づくりなどを担う
 - 小規模: 10人程度の小規模であることで、共同購入の意思決定がしやすく、食事づくり等の供給側も主婦のスキルと家庭の調理設備で対応できる

高齢者グループリビングの特徴

基本的性格

- 生活支援サービスを地域から共同購入する高齢者の小規模集住形式
- 介護サービスを受けるための集住ではなく、一人暮らしの不安の解消、バランスのとれた食生活等を通して生活基盤の安定を図り、入居者が地域住民の一人として生活することを支援する仕組み

- 助け合い活動等の地域での活動経験の長い団体が運営している事例では、グループリビングへの取り組みが活動拠点の確保や経営基盤の強化につながり、10人の高齢者への住まいの提供と生活支援を超えて、地域住民へのケアサービス展開や雇用拡大に結びついている

アトリエ

- 地域との交流スペース
- 利用方法は各所で工夫
- コミュニティカフェの試みがあり、今後に示唆的
- カフェはスタッフが常駐でき、気軽に人々が集まる地域のつながりの拠点になっている

共用部分 専用部分

居室

- 面積25㎡、洗面、トイレ、ミニキッチンを備えた質の高い居室
- 家賃負担を考えると、高齢者専用賃貸住宅の規定に合わせて18㎡以上とすることも一案

食堂・厨房

- 主婦などがワーカーズ等に加わって調理を担当
- 10人分の調理であるため、家庭の厨房設備と主婦のスキルで対応でき、家庭的な料理を味わえる
- 地域の雇用を生み出しており、食材も地域で調達
- 食事づくりのワーカーズ等が地域の配食活動等に取り組む事例があり、コミュニティ形成に寄与

共用部分全般

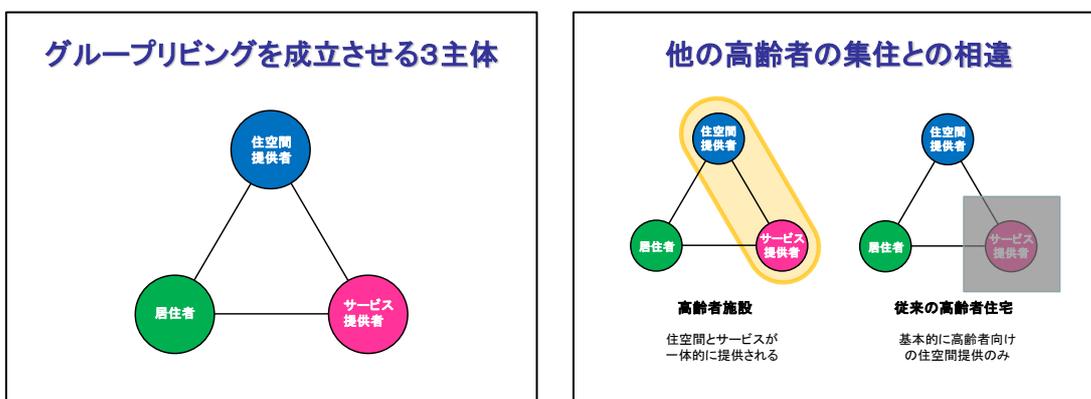
- 10人の共同生活行為を受け止める空間
- 使い方のルールは基本的に居住者間で決め、清掃等の管理はワーカーズ等に委託
- 共用部分の面積は賃料やランニングコストとの関係で、各グループリビングの選択の自由度があってよい
- 利用度をあげるために冬季の効率的暖房設備が必要

(○は検討課題)

グループリビング（以下、「GL」と表記）の定義として「生活支援サービスを地域から共同購入する高齢者の小規模集住形式」とするのが一番いいと考えています。生活支援サービスは食事作りや共用部の清掃、その他の目に見えない部分もあります。これらはお金を払って購入するサービスです。共同購入とは居住者が生活支援サービスを選択して購入するという意味です。最初からメニューが決まっているのではなく居住者が選ぶというのが本来の形です。地域からサービスを購入するために、サービスを生産する人は地域に住んでいます。小規模というのはどういうサービスを自分達で購入するかを決めやすい。それを供給する側も10人という人数だと、主婦のスキルの範囲内で行える。食事づくりも家庭の台所でできる。これが20人になると厨房が必要になります。この定義はもともとCOCO 湘南台が事例の1つとしてあるので、そこから考えました。

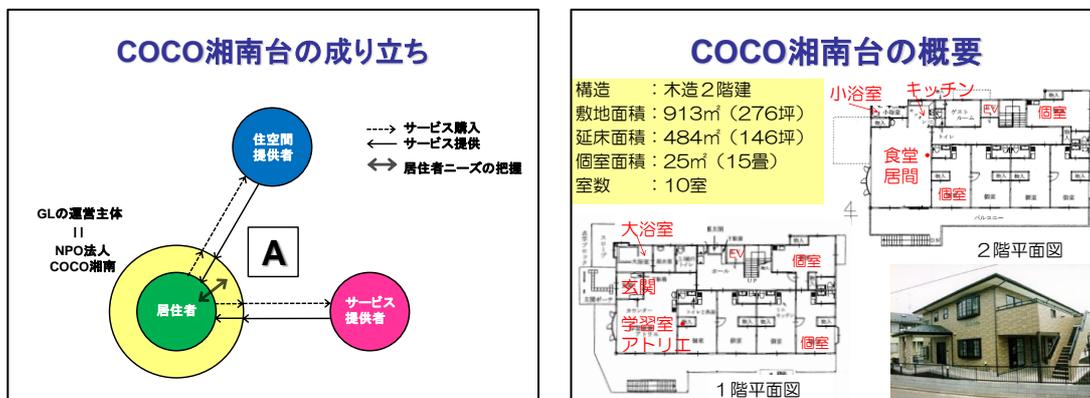
COCO 湘南台はNPO 法人COCO 湘南台が作っているGLの1つで、最初のGLです。西條さんが仲間と一緒に作り上げていったものです。これをモデルとして、JKAが補助金を出し、全部で16件のGLができました。実際にできたときにJKAに頼まれて調査をしました。

そうした経験をするなかで、グループリビングを成立させる基本的な要素として、居住者、住空間提供者、サービス提供者があり、そのいずれかが運営主体になっており、その主体がどこにあるかで運営システムが異なることに気づきました。



GLは高齢者施設とどう違うのかとよく聞かれます。施設は空間とサービスが一体的に提供されている点に特徴があります。有料老人ホームは住宅で居宅介護（特定施設入居者生活介護）を受ける場ですが、空間とサービスが一体化していることからすれば施設と同様のものと位置づけられます。一方でバリアフリー住宅をつくり、LSAをつけるというところから始まった高齢者住宅は、現在、サービス付き高齢者向け住宅に集約されつつあるが、これも基本は住宅サービスを付けるというものである。グループリビングの原型は居住者

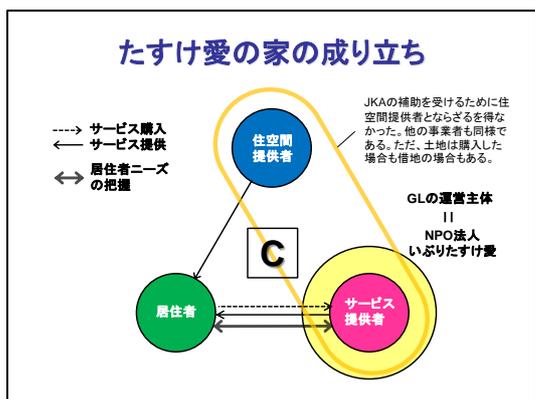
が中心になって、住空間提供サービスと広義のケアサービスを共同購入するという形で始まった。



そのプロトタイプである COCO 湘南台は、NPO 法人 COCO 湘南が居住者を包み込むような形で作られた居住者が正会員になる NPO です。実際に作った西條さんは住んで運営主体のトップでもあります。ここで→が2つあります。一つは NPO が建物を一括借り上げする契約です。もう一つは、サービス提供者のワーカーズコレクティブと契約して、どういサービスが欲しいかを伝えて、そのサービスを買います。どういサービスが欲しいかというのは居住者と NPO の間で決めて、NPO がまとめて契約してサービスを買っています。まさに GL はこういうところから出発した。これと同じところから出発したところ、つまり、自分で居住者が運営団体を作り、契約主体になり、サービスを購入したところにはありません。

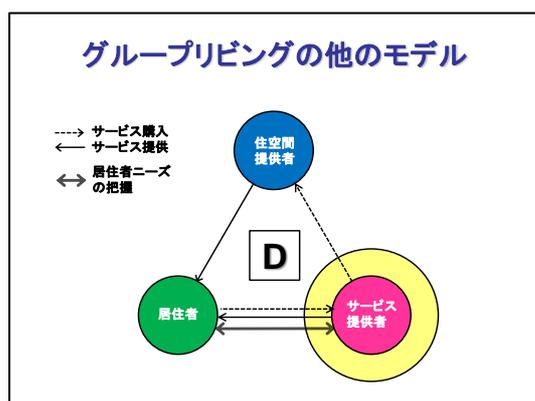


居住者の意向を聞きながら柔軟に対応しています。今のサ高住でも契約関係だけからみれば、COCO 宮内と同じ形態のものはありますが、居住者の希望に柔軟に対応するということはずまいと思います。契約時に決めたものでやっている。COCO 宮内の場合には居住者中心という考え方を湘南台から学んだことによって、運営の仕組みは異なっても COCO 湘南台タイプに近づいている。



たすけ愛は JKA 補助事業の代表的事例です。サービス提供主体が作りました。JKA の補助を利用して自分達で建物を作ることができ、住空間提供者にもなりましたが、軸足はサービス提供者にあります。居住者はサービス提供者であるいぶりたすけ愛と契約し、住空間提供とサービス提供を受けます。これは一つ間違えると「施設」的運営になるおそれがあります。しかし、ここでは共同購入に近いものにするために、

居住者のニーズを常に把握する機能が備わっていてそれに応じたサービスをしています。本当に大切なことは自立と共生を具体的に日常生活の中でどう実現するかで、運営主体がどのくらい居住者に自由な環境を用意し、必要なものを提供できるかが鍵になります。もともと助け合い活動をベースにした運営主体であったことが、こうした環境をつくることに自然につながったように思います。



もう1つ実際にはないが、可能性のあるモデルを提示しておきます。サービス提供者が住空間提供者と連携をして土地建物を用意してもらおうというタイプです。一括借上げの責任をサービス提供者がもち、資金は土地所有者が用意するというものです。

GLをつくるにはどうしたらよいか。一番大切なのは居住者のニーズを捜し解決する仕組み。それを、居住者を含む運営主体がやるのか、サービス提供がやるのか。不動産提供者がやるのか。住空間提供主体は基本的に不動産業。これが居住者のニーズを実現するのは一般的には難しい。したがって、COCO 湘南タイプかいぶりたすけ愛が普及はしやすい。COCO 湘南台が一番いいか、その仕組みが優れているかという、運営主体が事業体としての厳しさを持てるかどうかポイントです。居住者が入れ替わっていく中で、ベースにある共同性が変化することにどう対応するかが課題であり、NPO の事業体としての力量が問われることになると思う。事業体の経験が豊富だ

という意味では、サービス事業者の方に優位性がある。

グループリビングの作り方をめぐって

- 居住者のニーズをサービス提供に反映する仕組みが重要
 - 原理的にCOCO湘南の仕組みは優れているが、運営主体が持続的な事業者でありつづけるための健全性をどのように担保するかが課題
- 住空間提供者が運営するケースが増える？
 - サービス付高齢者住宅向け住宅の供給促進
 - 一般的に、サービス提供者は運営者が設定する枠組みで行動することを求められる
- 居住者の入れ替わりへの対応した運営

高齢者居住の市場を考えると、サービス付き高齢者住宅の制度を使って、住空間提供者が事業主体になる可能性が増えるのではないかと。そこにサービス事業者がサービス内容を固定して委託するという形式にどうしてもなりやすい。それで本当に居住者のニーズをくみ取れるかが課題。ある程度効率性を求めてサ高住をつくると10人は効率よくない。どうしても20、30になる。運営がマニュアル的になりがち。

COCO 湘南台は確かにすばらしいが、居住者が変わっても事業は継続していかなければいけない。これをいい状態でなければいけない。それをどうしていかないといけないか。今後の課題である。

高砂ワークショップ

高齢者協同居住とコミュニティづくり

神戸女子大学家政学部家政学科
教授 上野 勝代

はじめに—協同居住とは—

<p>協同居住に注目した経緯</p> <ul style="list-style-type: none">□ 1993年の北欧への在外研究□ ・阪神・淡路大震災における仮設住宅での孤独死 ⇒ ケア付き仮設住宅、地域型仮設住宅 (共同の台所や居間 を持ち生活援助員のサポートがある)	<p>はじめに—協同居住とは—</p> <ul style="list-style-type: none">□ 建築空間としては、「個人の住戸とは別に共同空間をもつコミュニティ形成に配慮した住宅」であり、住み方の面では「複数の人たちが共同空間を活用して集まって暮らす居住形態をいう。 …グループハウス、グループリビング、コレクティブ住宅、コ・ハウジング
--	---

まず初めに、協同居住…この協は「共」ではなくて力を合わせる方の「協」なんです。これってどういう意味？と思われるかもしれませんが…お財布を一つにするという意味ではなくて、力を合わせる、つまりそれぞれは個性を持ちつつ実は助け合いながら、という意味をこの「協」はもっていると思っております。協同居住っていう名前を聞かれる方も非常に少ないと思うんですが、日本ではグループハウス、それからグループリビング、そしてコレクティブ住宅、コ・ハウジング、いろんなカタカナの名前の住宅が今世間で使われています。ただ、これらに共通しているのは自分個人の住居と共に、別に共同空間…（ここでは共に使うという意味での共同ですね）を持つコミュニティ形成に配慮した住宅であり、住み方の面では複数の人たちが共同空間を活用して集まって暮らす居住形態というように、私は一応定義しております。ここでは、協同居住は何かというより、暮らし方の面でこれからお話をしていきたい、集まって住むことによって楽しく暮らせる、いわゆる暮らし方の問題を追及していると思っていただきたいと思います。

ところで、今私はもう高齢者になったのですが、初めて協同居住に注目したのは今から20年前です。実は子どものことで悩むことが多く、家事・育児と働くことがうまくいかなくて、子どもにいろんな問題が起こった時に悩みました。そういうときに、私の悩み、働いている女性は皆こういうところで悩むのではないかなということ、働いている女性たち—お母さんに優しい国…（昨年 NHK が、世界で一番お母さんに優しい国ノルウェーというのを取り上げたんですが）20年前も世界で一番男女共同が、平等が進んだ国北欧のノル

ウェーに行ってきました。そこでいろんな住宅を見る中で、実はシニアの人たちの協同居住があったのです。特に隣国のデンマークが進んでいるんです。何故って思いました。わからなかったのですね。20年前の北欧ではすでに24時間看護も介護も進んでいます。それなのに何でわざわざ皆が集まってグループリビングしないといけないのかしらと。周りの研究者に聞いたのですね。知人の一人は「そりゃそうよ、自分が体が弱くなって、いわゆる日本でも特養のような施設に入れられるとき「はい、あなたはここに行きなさいって決めるのはケアマネの人でしょ。だから、お隣に誰が入るかっていうのは自分で決められない。そうすると、やっぱり人生の最後、仲間と共に気の合った人たちと最後を送りたいという思いがあるじゃない。そういうのでつくられたのよ」と説明してくれました。って言われて、それでやっと納得しました。またそのときにちょうどデンマークのコペンハーゲンで、シニアの人たちのコ・ハウジング、コレクティブ住宅などの協同居住住宅についてのいわゆる国際シンポがありました。そこに行ってみると、なぜやっているのかが別の視点からわかりました。北欧では既に福祉が進んでいます。そうすると財政的にはお金をどんどんつぎ込まなければいけなくなり、そこで、国家にとって大変なこととなります。そこで、仲よく皆さんが暮らしていただけるならば、医療、保健、福祉の面で、財政的にはむしろお金を出さなくてよくなるかと推測できます。事実その頃に始まっていた協同居住の入居者は以前よりも悪くなるっていうのではなくて、むしろケアが少なくなってきました。つまり財政的にもこういうのを進めていった方が、得になるというバックグラウンドがあり、いわゆる施設から住宅へ、そして住宅の中でもお互い仲良く暮らすそういう住宅づくりが注目されてきておりました。

一方、日本に帰ってみますと1995年、まさに阪神大震災が起こりました。そして家を失った方の多くは、お年寄りの方が多かったんですね。そうすると、兵庫県あるいは神戸市ともに復興型の公営住宅を建設するときに、高齢化対応（兵庫県は全部高齢化対応）の住宅をつくりました。また、仮設住宅の中でも孤独死の問題が社会問題へとなりつつありました。一方でケア付き仮設住宅、地域型仮設住宅といった、共同の台所や居間を持つ、そして生活援助員のサポートがあるような仮設住宅は孤独死は起こっていませんでした。そのような事情もあって、兵庫県を始めとして公営コレクティブ住宅がつけられたわけです。私は当初の計画には参加できなかったんですが、その後のコレクティブ住宅がどんな評価になるのか、人々はどういうふうな暮らし方をしているのか、というような調査に携わることができましたので、北欧と日本の初期の協同居住を研究することができました。

デンマークでみた高齢者協同居住



まずこのスライドは、当時の私が見たデンマークの一般的なものです。一般住宅団地の中の、いわゆる5階建ての互いに向かい合うような形の住宅10軒の内の1階部分を共同の空間にしています。



この共同空間ではお茶を飲んだり、それから子どもたちが来たり、あるいは私たちのような外来者が来たときの応接、子どもを泊める、あるいは皆がおしゃべりする。そういったような形で使われています。地下室には健康を維持するためのスライドのような器具も用意されています。ここの居住者は皆さん女性です。いわゆるデンマークでシニア向けのコ・ハウジングの第一号をつくったのは女性でした。



今のスライドはオーデンセで見たもので、二階建ての普通の賃貸公営住宅です。その一角の中に20人の人が住んでいます。デンマークはテナントでの暮らし、賃貸住宅であっても実は入居者が事前にいろんな意見をいうことができます。その一つをスライドでお見せするのですが、建築家は玄関のすぐ横を防犯の関係でこういうガラス窓にするのはダメだって言っていたんですね。しかし、入居者たちはここにカーテンを取り付け、カーテンが開いている時は、「さあどうぞ」。カーテンが閉まっているときは、「ちょっと今は一人にしてね」といったような合図をすることもできるので、このスライドのように窓ガラスにしてほしいといいました。もしこれが、カーテンがずーっと閉まっていたら、「なんか起きているんじゃないかな」ということもわかるようになっていたと言っていました。結果は、入居者の意見が採択されました。



このスライドが共同の空間のリビングと地下室の洗濯室です。

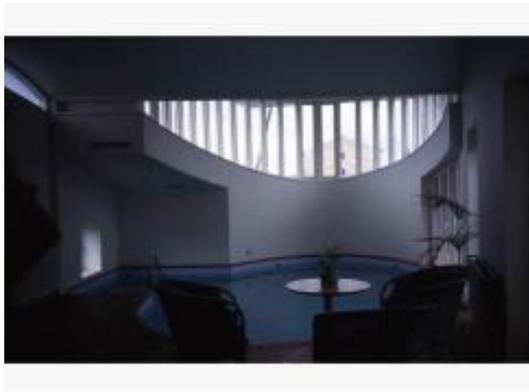
余談ですが、兵庫県の復興公営コレクティブ住宅で失敗した例があります。洗濯機を共同で持ったらいいだろうということで、洗濯機置き場をつくったんですが、実は使われていません。どうしてだと思いますか？一つは、やっぱり私は文化の違いがあるんじゃないかと思うんですね。日本人は、その頃のCMでありましたが、夫の下着を箸で摘まんでこう、

やっぱり嫌やというので（一同笑）。つまり、他の人と一緒に使うことというのは、ちょっと抵抗があるのではないのでしょうか。また、使用する際に他の人とぶつかったり、中味がわかったり、いつ洗濯に行ったらいいのか気を使わなくてははいけませんし、日本の洗濯機は非常に優れていますし。そういうようなことで、これはですね、日本には持って来れませんでした。



このスライドのコ・ハウジングは、環境を大事にしたいということでつくられたものです。このグループは、クリエイティブという名前なんですが、趣味を共同にした者同士でつくられました。共用空間としては、泊まることができるような予備室を持っています。





これは、王立アカデミーの先生方がすごく頑張ったところで、日本でいうと学士会というような人たちがつくったもので、空間的にはとっても素敵でして、プールまでつくっています。

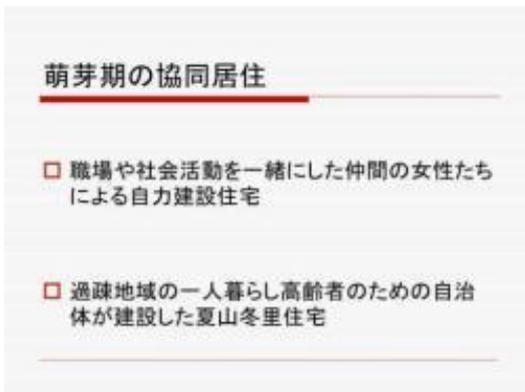
これはノルウェーのものですが、ノルウェーは木を大事にしている国で、こういう木造のつくりで高齢者向けコ・ハウジングをつくっています。



ここでは、戸建、あるいは二戸一ということで、グループでつくっています。非常に花がきれいですね。ノルウェーは北海油田もあるので、非常に経済的に豊かになっており、住宅価格も高くなってきています。



日本の高齢者協同居住

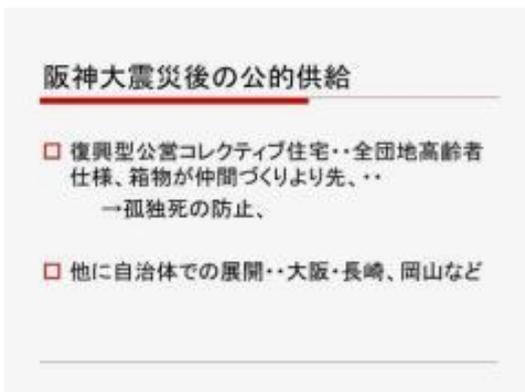


次に、どのような協同居住が日本で今まで実施されたのかを歴史的に少し見ていきましょう。

一番最初に私たちが日本での協同居住を見たのは、いわゆる伴侶となるべき男性の人たちが戦争で亡くなられた。未婚の独身の方たちが戦後一人で大変な生活をされてきた、職場やあるいは社会活動を共にしたような仲間たちによる、3人だとか5人とか7人だとかという小

規模な住宅づくりでした。これらは長い間初めから仲間でした。そして多くは社会生活を経験された方でした。その意味では、これは非常にうまくいった協同居住の型だったのではないかと思っています。

それからもう一つ、過疎地域の事例です。私が調べたのは広島県の豪雪地帯ですが、ここで一人暮らしのお年寄りが、冬になると雪に閉ざされて、そして火事が起こっても消防車がそこに入りにくい。そういう問題があるということで、町の中心部にそういう人たちを冬だけ集まってもらえるような住宅で、皆が協同居住をしたという例です。これも地域の人が皆よく知った人であるし、いざとなったら自分の家はあるわけですから、自分で選ぶことができたということで、これもわりとうまくいった例だと思っています。



そして本格的に始まったのは、先ほども言いました阪神大震災でした。これは、孤独死を防止するというのもあって公営住宅でやりました。ところが、公営住宅というのはご存知のように、皆さん応募して抽選で決めます。お隣が誰かはわかりません。つまり仲間作りが先ではなくて、箱ものが先にあって、そして皆に来てくださいと言って抽選するのですが、これは初めはあまり応募者がいませんでした。倍率が

低い。そこでですね、本来だったら協同居住として望ましい人ではない人も含まれることになったのです。例えば、息子たちが「お母さん、あそこだったら早く入れるよ。それに協同居住だから皆が手伝ってくれるよ」ということで、自立したというよりはもう本当にケアが必要な人も中には入ってしまったということがありました。

もう一つは、共益費の問題がありました。阪神大震災の中で家もつぶれた方たちです。公営住宅に入ろうと思ったら、家賃よりも公営住宅のその共益費の方が高くなってたというケースも出てきました。そのため、せっかく立派な共同空間であっても、蛍光灯がもつ

たいたいから外していくとか、あるいは「共同空間をできるだけ皆さん使わないようにしよう。そうしないと電気代高くなるからね」なんていったような、本来皆がそこで楽しむべき空間ができなかったということもあります。

それからもう一つ、これも失敗だと私は見てるのですが。コレクティブ住宅は食事作りを皆がするものです。ところが、実際には食事をつくる人は女性、食べる人は男性、おまけに男性はお酒も入っていると長く宴会になってしまい、片づけをする女性たちはいつまでたっても後片づけ出来ない、といったような形の食事作りでの問題がありました。食事作りにはそれぞれの家庭の味があると思うのです。そして、また多様な価値観もあります。有機の方がいいよって言う人もいるし、いやいや安い方がいいよって言う人もいるし、これは味が濃すぎる、薄すぎるっていったような、そういう問題も出てきました。

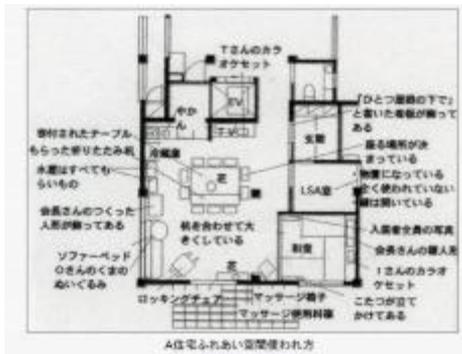
また、コレクティブということで、型にはまった柔軟な対応をしなかったという問題が出てきました。岡山でもそうだったんですが、90歳のおじいさんが入ってきた時、皆で家事しましょうね、でも90歳のおじいさんは体が弱くてできなかった。そうしたらルールの中で皆が平等にお掃除をする、家事をするということになっていたから、あの人はやってないという不満が出て、とうとうその人が出ていかざるを得なかったということも実は起こってきました。



これは、当時の復興コレクティブの皆で仲良くやっている様子です。



私は最近復興型コレクティブ住宅が現在 17 年たつてどうなっているかを見てきました。これは片山住宅で、一番小さく、6 人という入居者の人たちでした。ここは坂の上にあります。坂になっているものですから、もう 15 年たつて、かなり坂道を降りるのが大変だということが出て参りました。立地が大切ですね。

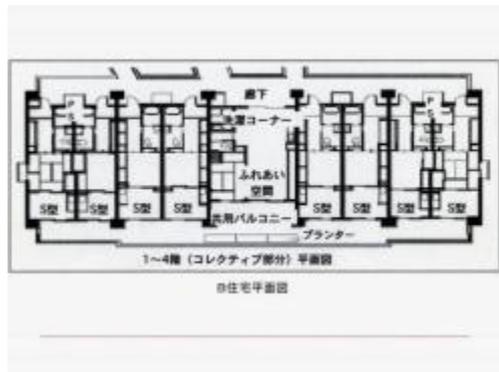


A住宅の現状

- ・この間退去された入居者は3人
- ・代表者Oさんは交代したがサポート役
- 高齢、入居者の変化で協同の催しができない
 (食事は年3回、Oさんがつくる)補給はOさんの孫
 ・高齢となって自治会活動はしんどい。入居者は60歳くらいの人をいれてほしい。坂道で買い物出られず、孫に依頼。バリアフリーはありがたい。
- ・行政はコレクティブの内容を知らせずに入居者を入れるので困る
- ・コレクティブに入れてよかった。1人では不安。

6人ですから、以前は認知症のグループホームのように一緒に食事をしてたというんです。現在はもうそういうことも無くなってきています。

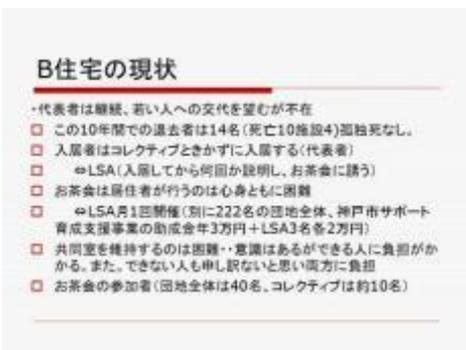
共用空間はこういう形できれいに整理されています。ここにはLSA—ライフサポートアドバイザー(生活援助員)が時々来ています。また、高齢で従来のリーダーの人が大変になって、お掃除はリーダーのお孫さんに来てもらってやっているという状況もでていました。



一方、このB住宅というのは高層のしかも単身者の多い住宅です。



1階、2階、3階、4階のこれだけの戸数の中の真ん中にふれあい空間をつくって、ここのベランダ側は全部お互いに行き来できるようになっています。これは空間的には非常に面白い、かつ同じ階の真ん中にしていうことで、非常に当初よく使われていました。大変元気な男性のリーダーの方がやっていたんですが、最近はLSAさんがサポートしながら。皆さん15年たったら体力が無くなってくるんですが、その中で動ける人がLSAさんと一緒になってお茶会を開いているという状況です。



このぐらいの普通の住戸の中を、こういう形で実施しているのは、先ほど私が一番最初にお見せしましたデンマークの例とよく似ている感じですね。

地域の福祉力による支えあい

- 2006年7月(入居開始から8年後)
喫茶「ほんわか」(民生委員中心)
- 2007年6月 なんでも相談窓口「和みの場」
(まちづくり協議会福祉部)一ひろば事業
- 2008年3月 会食会「1日ゆったりの会」
ボランティアグループ「ぐるーぶ なか」
- 2011年5月 ミニディサービス (NPO法人ラポール)
- 看護師さんによる「町の保健室」月1回開催

協同室の使われ方

- 週1回は開かれる
 - ・費用は外部の使用は1日会場費3000円、
水光熱費1000円、掃除は利用者
- 夏期 ・節電、熱中症対策として週1午後開放

先ほど言いました蛍光灯の抜いていたというのはこの住宅で、当初あまり共同の生活はなされてなかったのですが、現在行ってみると、この空間があることによって地域の人たちがここを使って、お食事会だとか開いています。このスライドは何でも相談できるような形で、ここにはスタッフの人がいて地域の福祉の人たちが入り込んでいます。つまり、協同居住の人だけではなくて、地域の人によってこの空間を使ったときにはお金を出すので、電気代などは居住者の負担にはなりませんし、お互い仲良くなれます。共同空間については、その空間をどのように使うかということで、楽しいイベントになるのか、それともそのまま置いておく形になるのか、いろんなところが出てきているなと思いました。でも、空間があるからこそ、多様な使われ方ができるとわかったことです。同時に地域の福祉力、地域の福祉資源、そういうものを取り込んでやるのが、高齢者の住宅を長続きさせていくためには重要だというのがわかりました。そして、夏には節電対策、熱中症対策として、皆がそこに集まったら電気代も安くなるし節電にもなるよ、という形で使われているこのスライドの事例も面白い取り組みだったと思います。

協同空間のよさ



協同空間の使われ方



また共同空間の良さを教えてくれたのが、このスライドのD住宅なんです。共同空間（ふれあいの空間）があって良かったことは何ですか？と聞いたことがあります。ある人が「自分が亡くなる時、皆から見守られてここでお葬式してくれるというのがわかる」ということを言われたんですね。聞いた時にはわからなかったのですが、今私はこの年になると、やはりそういうことは大事なんだなというのをしみじみ感じるようになりました。



個人(大家)によるグループリビング

- <グループハウスさくら>
 - ・旧厚生省から「高齢者グループリビング 支援モデル事業」
 - ・日常生活のルールづくり、外の風を入れる。
- <民間賃貸マンションのオーナーがふれあい空間をつくる>
- <医師が診療所＋賃貸マンション＋ふれあい空間をつくる>

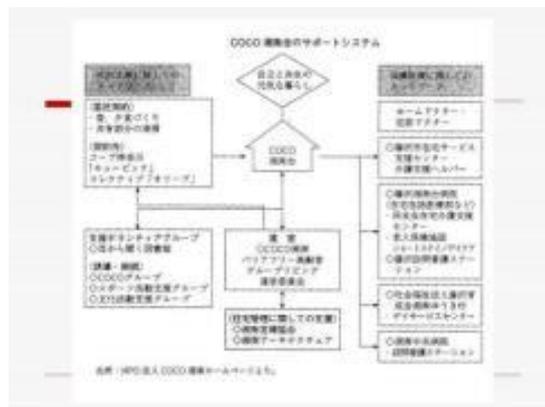
その後に出てきたのは大家さんによるグループリビングでした。この典型が、高齢者グループリビング支援モデルの第一号という、グループハウスさくらでした。

これが、さくらの空間です。こういう形でこちら側に食堂、向こう側に皆の居間という形で作られたものですが。

これは、平等性という点では難しいところがあります。大家さんに他のメンバーは遠慮せざるを得ないし、誰が入るのは大家さんが決めますので、ある意味で皆が平等という立場にはなりにくいという問題があるのではないかと私は思いました。ただ、ここで教えられたのは、外の風を入れることの大事さですね。先ほど仮設コレクティブ住宅で食事作りが一つのネックになると話をしましたが、ここではご近所の方、主婦の方に一日ずつ、人数が少ないので自分の家庭の料理プラス6人分の料理を作ってねということをしています。それから朝のお味噌汁は人によって味が違うから、お湯を足してもいいし、お味噌を入れてもいいよと、その人の味に合わせようとしています。復興型コレクティブの中で、外からお弁当を取ってくると皆さん、これは美味しいね、ここはまずいね、あそこはもうやめた方がいいねという不満を外に向けて皆がやります。中で食事づくりをすると、なかなかそういう不満が表に出ないし大変です。

NPO COCO湘南台の取り組み

- ・1999年に「自立と共生」を合言葉に、だれにも干渉されず、開かれた地域で気の合う高齢者で暮らす
- 豊かな共同空間と地域ネットワーク
- 中間層に手の届く入居・生活費負担



「自立と共生」による暮らし方の利点

- 介護予防的な生活を自然に実践できること
- 必要なサービスを受けて元気に活動できる
- 孤独感がない。
- 自分のことは自分でする喜びがある。
- 高齢者対象の犯罪防止ができる、等々。

↓↓
**「暮らしの提案」を提案
 COCO湘南による活動**

1999年、自立と共生という言葉で、誰にも干渉されず、開かれた地域と気の合う高齢者で暮らすというCOCO湘南台ができました。私はこれが日本型のグループリビングの中でのいろんな良いところと、様々な点で問題であったところをクリアしているシステムになったものだなと思っていました。

ここの特徴の一つは豊かな共同空間と地域ネットワークをうまく張り巡らせていることです。二つ目に中間層に手の届く価格のシステムをCOCO湘南は作り出したことです。ここでは地域のいろんな地域資源を生かしつつ、システムとしてつくっていらっしゃいます。

そして、自立と共生の暮らし方の利点を運営委員会の政策パンフレットから引用させていただきましたが、その結果がこのスライドに示されたものです。つまり健康面、精神面、安全面、安心面、情報面、環境面といったところで、グループリビングをすることの良さがまとめられています。

一つは、介護予防的な生活を自然に実践できるということ。必要なサービスを受けて元気に活動できる。なにしろ孤独感がない。自分のことは自分でする喜びがあります。よくありますよね、デイサービスを使ったとき、まるで幼稚園児のように扱われる。優しく扱われるのはいいことだけれど、やはり今まで生きてきた人生、確かに認知症になっても、その人にはそういうことがある。そして、何でもやってもらうことというより、自分がやれることをやってあげる喜びというのがありますよね。やってもらったら、いつも“すみ

ません”，いつも“ありがとう”と言うばかりです。そうではなくて，自分のことは自分でできる喜びがあるということ。それから，高齢者対象の犯罪防止になります。その他に，私自身がCOCO湘南で良いと思ったのは，COCO湘南による活動，暮らしの提案をいろんな自治体を含めて追及されていることですよね。また，COCO湘南台は慶応大学の人たちがずっと関わってサポートされていますし，こういう形で外に向けて提案していく，普及していく活動をされてるというのは，NPOとしての良さをこの中に見い出しているとは私は思っています。

最後にその他の例として，いろいろな所で地域づくりの一環としてこの協同居住を始めたのがあります。例えば，庄内地域における生協組織を中心とした形でそういう住宅をつくった場合もありますし，集合住宅の中の一室をリノベーションして居場所づくりをしたというやり方もあります。大阪府のふれあいリビング事業や，兵庫県や神戸もしています。あるいはマンション内の空きスペースを改築して，皆が集えるような形も，これら今できるところから行うといういい例ではないかと思えます。

地域づくりネットワークからはじまった協同居住

- 庄内市
- 生協組織によるまちづくり事業協同組合
- 高齢者福祉生活協同組合

集合住宅におけるリノベーションにおける居場所づくりにみる協同居住

- 大阪府ふれあいリビング事業 兵庫県
- マンション内 空きスペース改修



調査対象のグループリビング概要

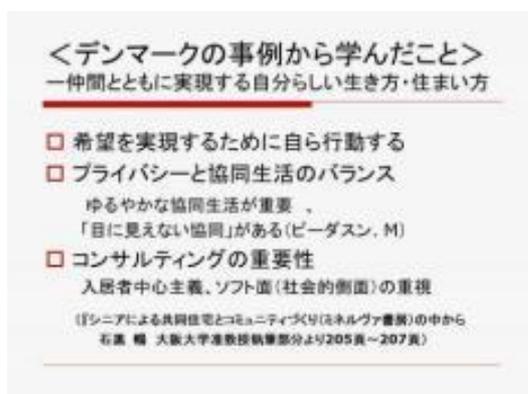
	タイプ	供給主体	整備年度	管理戸数	空間の特徴	
事例A	別棟	行政	1999	252戸	活動空間が広く、座席数が多い。道路に面しており、地域住民も利用しやすい。厨房施設が充実。晴れのときは、北側の団らんコーナーからの眺めが大変良く、北側屋外はテラスになっている。	
事例B			2000	180戸	喫茶コーナーの他に独立した健康相談室を設置。厨房と団らんコーナーにいる人が会話をしやすい。目立ちにくい場所にあるが、近隣の施設（児童遊園や公民館）の利用者が立ち寄りやすい。	
事例C	集会所改修		2003	510戸	既存集会所に喫茶コーナーを増築し、集会所を開放することで座席数を確保。団らんコーナーが南に面し、開口部が多いため、明るく開放的。厨房と団らんコーナーにいる人が会話をしやすい。	
事例D			2003	855戸	利用されていなかった集会所を改修し、リビング外にもカフェテラスを設置。座席数も多い。テラスが道に面しており、そこから中に入る。中の様子がよく見えるので気軽に入りやすい。	
事例E			2003	268戸	集会所の建て替え後、喫茶コーナーを設置。そのため、喫茶部分の活動空間がとても狭い。	
事例F	マンション内空きスペース改修		民間	2001	401戸	マンションの空きテナント部分を改修。室内には活動で制作された作品がたくさん飾られており、賑やかな雰囲気となっている。南に面しており、屋内は明るい。
事例G				2003	23戸	マンションの1階の一室を改修し、地域のくつろぎの場として利用。外からはわかりにくいのでバルコニーに垂れ幕。室内には作品が飾られている。元々住戸であるため、家庭的な雰囲気。

これは大阪府の例ですが、集会所の一室をこのように、こちらが集会所、向こう側は喫茶コーナーにして、100円のコーヒーや紅茶を出しています。こうすることで良いのは、居住者の人が、例えば自治会長さん、あるいは民生委員さんに相談したくても、トントンと扉を叩いて訪ねていかねばならないところを、その人たちがこの場所に来られると気楽に相談できることになったということで非常に良かったという話も聞きました。



これはマンションの一室に、ほっこりする場を作ろうねということで実現した例で、ここでかるた遊びをしている写真です。

北欧の事例から学ぶこと



北欧の中でも私はデンマークが面白くってデンマークの事例をずっと追及してきました。デンマークの事例から学んだことはいったい何だったのだろうか。それは、仲間と共に実現する自分らしい生き方、住まい方を追求することなのですね。デンマーク人は50代、60代、まして70代になっても、自分の夢、希望を持って自ら行動しています。そういう意味でいうと、幸福、幸せを追求するためにグループリビ

ングをする。グループリビングというのは、その意味では、自分は特養に入れられるのではなくて、自分で自己決定ができるときに予防の形で、仲間と一緒に暮らすと楽しい人生が送れることです。隣人に大変な人が来たら、まさに地獄ですよ。プライバシーと共同生活のバランス、これが日本人は下手だと思います。仲良くしようって協同居住を始めて、実はうまくいかなかった事例を複数見てきました。その中には仲良くしようと思って、しょっちゅうその方が訪ねてくる。それを断ることも難しい。そして、とうとうその協同居住から出てしまいました。そのようなことを複数見てきたんですね。そのためには、ゆるやかな協同生活、年を召したらそれぞれの人に自分流があります。お互いがそれぞれの自分流を大切に、しかしちょっと一緒に行く。協同というといつも集まってお茶をしたり、イベントをしたり食事をしたりっていうだけじゃないのでは、誰かがそばにいるという安心感もそうではないでしょうか。復興コレクティブ住宅も一般の住宅に比べると、この17年間に孤独死が起こっていないんですね。つまり、何かのときにはさっと駆けつけてくれる隣人がいる。そういう意味でM. ピーダスンは、目に見えない協同がこの中にあることの、特に高齢者にとって大切さということをもっと価値を見る必要があると提議しています。プライバシーと協同生活のバランスを取るために、グループリビングをするに際しては、お互いに側にいても気にならない。いわゆる価値観が一緒。あるいはお互いにそういうルールができる人であるかどうか。仲間であるかどうかということを経験をかけてやっています。さらに、なかなか高齢者の場合は難しいのですがコンサルティングの重要性があります。デンマークにはシニアを対象とした協同居住のコンサルティングをやっている人たちがいますが、そこでは入居者中心主義が貫かれています。残念ながら若い世代を中心として皆が住宅づくりをする日本型のコーポラティブっていうのは、コーディネーターは建築家が中心でした。建築的空間としては素晴らしいのですが、ある意味でその建築家の作品と位置付けてやられているケースも中にはあります。もちろん空間が素晴らしいことは大事ですが、まずそこに住む人の意見を大事にするというのが原則ですね。デンマークでは特に高齢者の場合は、グループができて、皆の意見ができて、そのあと建築家が選ばれるという形にしています。

日本の事例から学ぶ

日本の事例から学ぶ

- 協同住宅づくりは「暮らしを充実させるための空間」づくりである。
- 高齢期の安心居住には「医療」「保健」「福祉」「生活支援」+仲間が必要。地域コミュニティに結びついてこそ安心な居住空間になる。
- 自立して協同生活を行うとは、地域資源を活用し、それをマネジメントすることをいう
- 気楽に集える共同空間をもつことはコミュニティでの暮らしが豊かになること。

日本の事例からは、やはり協同住宅づくりというのは空間というよりは暮らしを充実させるための空間づくりであること、だから箱ものではないということ。それから安心居住には、医療、保健、福祉、生活支援。そういうものと結びついていると同時に、仲間が必要です。自立して協同生活を行うって言ったら、全部自分がすることのように思われるかもしれませんが、そうではありません。地域資源を活用し、それをマネジメントするということです。気楽に集えるような共同空間があるならばコミュニティでの暮らしが豊かになるということを今までの調査からわかりました。仲間がなぜ必要なのかをデンマークの中で言われている言葉を言わせていただきます。デンマークの様々な教育に影響を与えた人に、グイントヴィという人がいます。彼は、人間というのは人と人との相互作用によって成長していくものだと言いました。つまりいつになっても仲間、お互いに相互作用できるような人に囲まれていることが非常に大事だと言われています。

以上、今回グループリビングのいろいろな例をお見せしましたが、集まった人によって多様な形ができていいのではないかと私は思います。ただ、その場合には、きついルールを作るのではなくて、ゆるやかな。しかし、一定の生活のルールを作りながらお互いに生活していくことが大切ではないでしょうか。そのことによってデンマークで示したように健康な期間が長引くならば、それこそ本当に高齢者にとって幸せなことではないかなと思っています。

てのひらの暮らし

NPO 法人てのひら
理事長 石原 智秋

こんにちは、石原でございます。

レジュメの方にてのひらの理念や運営方針を書かせていただいていますので、今日はそこはカットさせていただきます。

グループリビングって何ですか、という方もいらっしゃると思うのですが、10人以下の高齢者が自立して共に暮らす第三の住まいと私たちは申しております。これから、てのひらの暮らしを居住者の方にお話ししていただく予定にしておりますが、その前に少しだけお話しさせていただきます。

てのひらでは、違った時期に違った背景を持ちながら居住された方々を地域とどう結び付けていくか。それから孤独からどう解消していくか。それと、隣同士がどんなお付き合いをしていただくか。居住者の孤独を防ぐためにあれこれと考えております。安心・安全なところにせつかく移り住んだのに、集団生活の中で孤立してしまつては意味がありません。集合住宅での孤立ということをよく聞いております。地域のいろいろな方々と交流すること、それが一番大事だと聞いております。開設当時、誰も使わない共有空間のリビングを見て、どうしよう…と思案いたしました。そしてコミュニティ喫茶を作ろうと考えました。けれども、居住者の人たちがコーヒーを飲みに来られて、若い方々、元気な方々と一緒にそこで楽しめるだろうかと思いました。結局、今てのひらにあるデイサービスを3か所に分けることにいたしました。グループリビングの1階を居住者とデイで共有すればどうなるのかなと思って、実現いたしました。居住者の安全確認を兼ねた、ミニデイサービスの誕生です。1階に降りれば誰かがいて、「おはよう」や「こんにちは」とか、三時になれば「一緒におやつどうですか」などの声をかけてくれる。そんな挨拶や誘いがかかってくる。散歩や買い物のときにデイを覗いてみたりという暮らしはいいなと思いませんか。簡単なことなんですけど、ちょっと質問を出します。お手元にお持ちだと思んですけど。もし親が、または自分が転倒して大腿骨を骨折しました。そして一月が過ぎて病院から退院してくださいと言われた時に、皆さんならどうされますか。まだ上手に歩けない時なんですけれども。三つ挙げております。病院にもう少しおいて欲しいと頼み込む。二番目に、どこか受け入れてくれる施設を探す。三つ目、家に帰る。一番選ばれた方いらっしゃいます？手を挙げてください。二番を選ばれた方…少ないですね。皆さんお家に一回帰られますか。まだ歩けないのですが。私が思ってることと違いました。たぶんここに書いてある通りに、大体の方が不安なので施設を探すようになると思っていました。もう転倒したらダメですよ、転倒したらダメですよって、家の者にも言われ、自分も怖いと思い、部屋から出ないでおこうと思うようになって動きをやめていきます。その後のことは想像していただければわかると思うんですけど…いつも思うんですが、転倒して骨折することを怖

がることより、入院しても車椅子でも安心して暮らせる住まいがあることの方が大切なんです。家に帰りますという方がほとんどでしたので、私ちょっと嬉しいような気持ちでおります。今日ぜひ覚えて帰っていただきたいのは、グループリビングでのひらは、自宅ではないのですが、安全・安心に暮らせる住まいであるということなんです。90%の人はあそこは施設だから、施設に住むのはなあって言われるんですけども、決してそうじゃないんですね。賃貸住宅のワンルームマンションです。施設ではないということを覚えて帰っていただきたいんです。どなたかに聞かれたら、あそこ施設ちゃうでっていうことを言っていたいただきたいんです。自宅での暮らしが不便になったときに、また自分で寂しいなど感じたとき、まだ少し心に余裕があるとき、もういっぱい倒れそうになってからどうしようじゃなくて、ちょっと心に余裕があるときに、このような第三の住まいに移り住むという選択肢があることを思い出していただけたらなと思いつつ、次は居住者の一人、松本さんから今のリビングの生活を発表していただきたいと思います。



てのひらの暮らし

居住者 松本芙美子



てのひらの3階に住んでおります,松本です。日々の暮らしの一端を聞いていただけたらと思います。レジュメにも書いてあるように4つに分けて話したいと思います。

まず一番目,グループリビングてのひらに入居したわけ。私は介護の仕事をさせてもらっています。その中で,利用者さんが高齢になり,だんだん居場所がなくなってきた,自分の意思とは反対に施設に入所させられる悲しい姿

を見てきました。だからこそ,今元気な間に,自分で最後まで暮らせるところをと思って探しました。幸い,てのひらは駅に近い。そしてすぐ前に社協や福祉センター,文化会館などがあり,スーパーや病院,銀行がすぐ近くにあります。警察も近いのでいいと思いました。それから,目の前が加古川の土手で,このように朝日が昇ってとてもすばらしい場所で,散歩コースにはもってこいなので,よく歩いております。そのような立地条件がよかったということと,もう一つ大事なことは入居のときに,もし動けなくなったり,痴呆になる可能性も多いので,痴呆になったらどうなりますか?と聞いたら,痴呆になっても追い出しませんよ。あなたが居たかっただけで居ても大丈夫ですとお聞きしましたので,喜んで入居させてもらって,ちょうど一年になります。やっと高砂の住民になりつつあります。



それから毎日の生活ですが,今は元気に働いておりますので自炊をしておりますが,動きにくくなっても自分の居場所づくりができるんじゃないか。それは1階のデイサービスを共有することによって,少しずつでも自分の居場所ができるのではないかと考えております。今,この2階に住んでおられる女性の方は,毎日デイに来られる利用者さんを気遣いながら楽しくお話しされたり,い

ろんな手作業を楽しくしておられます。すいません,女性は3階でした。2階の方は男の方でした。将棋が好きで,利用者の方と将棋をしながら,このごろはお部屋に本を持って帰って,自分で「明日はこの手で〇〇さんとしよう」などと楽しんでおられます。また3階の女性の方は,さっき言いましたように,利用者さんと毎日楽しく過ごされています。も

ちろん、昼食はデイの方やスタッフと一緒に食べられていて、2人とも自分に合う居場所づくりをされながら楽しく過ごされているんじゃないかなと思います。現在私は土いじりが好きなので、こういう風にプランターでブロッコリーとか小松菜とか、夏はキュウリやトマトなどを育てさせていただいています。楽しみながら過ごしています。てのひらは、今のところは3人なんですけど、それぞれ独立した中で暮らし、健康面にはお互いに目配りはするけれども、自立はしています。他人を頼らないようにはしつつ、必要なときには手を差し伸べる。思いやりや配慮、そういうことは常に心がけているつもりなんですけど、てのひらの住人だけではまだまだ足りないところが。今はデイサービスのスタッフの方たちに見守られ助けられながら、安全で楽しく暮らせていただいております。

三番目の、地域との交流。グループリビングてのひらの1階を土日は地域の高齢者に解放されております。短歌だとかコーラスだとか小物作り。体操や健康マージャンなんかも行われています。私も一部に参加させていただいていますので、そんな繋がりも少しづつ出てきました。これは小物作りの一場面です。私は参加させてもらってると言っても、全部材料もいただいて、切ってもらって、ピッとのりをつけるだけなんですけども、そのうち皆さんと一緒にできるようになればなと思っております。おかげさまで、私は介護福祉士とヘルパーの資格を持っていますので、地域の高齢者を訪問させていただいております。できる限り、「てのひらに住んでるんや」と言うことにしています。「ほな働いてるんか、私より年上かあ」と言われながら、「元気でいたらこうして働けますよ」と言って楽しく仕事をさせていただいています。できるだけ地域との交流を大切に、新しい出会い、新しい友達ができたら嬉しいなと思っております。てのひらに来て私が良かったなと思うところは、まず一人だから自由気ままに勝手できるし、かと言って、心配なこと不安がないから安心して暮らせるということなんです。

終わりに、年を重ねることは否定できません。私ももう73歳になりますので、とても不安はあります。でも、私は今が一番若い日だと思っているんです。人生の中で、“今が一番若いから今できることを楽しもう。”だから今日の経験も、一番若いときにさせてもらったなと思っております。一番最初に申しました、最後まで終のすみかにできるって言われたことの一つの裏付けになるようなことを話します。私が一年過ごした中の経験ですが。つい3・4か月前まで暮らしていた84歳の方なんです。要介護2。肝臓癌を患っておられました。その方が先で私が後から入って、毎朝おはようと言えるのが嬉しいなと言って下さいました。おはよう言うだけなんですけども。その方はヘルパーさんや看護師さんの訪問、主治医の先生の往診などを受けながら、普段は1階のデイサービスで利用者の方と一緒に楽しく過ごされておりました。ときには、一緒に土手を散歩したり、文化会館での行事に参加させていただいたりして、健常な私たちと同じように周囲に感謝されながら、ずっと一緒に暮らしてたんです。床につかれたのは三日間ぐらいでしたかしら、亡くなられました。あっけなかったんですけども、私もそういう風になれたらいいなあと。最後まで住まわせていただけることをありがたいなと思いながら、私もこうなれたらいいなと願ってい

ます。ご清聴ありがとうございました。

川崎ワークショップ

COCO 宮内の暮らし

NPO 法人グループリビング川崎
理事長 原 眞澄美

COCO宮内の暮らし

NPO グループリビング川崎

今日のテーマは COCO 宮内の暮らしを皆さんに知っていただくのがテーマです。

COCO 宮内は「自立と共生」ということを旗印としたグループリビングという住まい方です。今日は研究者として知り尽くした人から、グループリビングという言葉が最近知ったという人までいらっしゃるのでは話の焦点が難しいですが、わかっていることは聞き流してください。

川崎市は COCO 宮内ができるときに COCO 宮内を川崎市安心ハウス交流支援モデル事業として、3年間支援金を出していただきました。それ以降は予算が厳しいということで、支援金は出せませんでしたが、その後川崎市で出している高齢期の住まいガイドに掲載してくれました。初めて載った時に「グループリビングは COCO 宮内 1 件です」と書かれた言葉を良く覚えています。2年ごとに改正があり、これが 3 冊目です。次のページはグループリビングについて、説明があります。3 冊目は大江先生と土井原さんに内容を検討していただき、こちらで書かせていただきました。

「グループリビングは 10 名程度の少人数で共同生活する住まいです。住宅内ではお互いの自由を尊重しながら、家庭的な雰囲気、自立した暮らしを営みます。運営側が生活者の暮らしを一方向的に決めるのではなく、生活者が自らの意見を運営に反映できる自由度の高さが特徴です。居住者一人ひとりが社会の構成員でありつづけられるように地域や人との繋がりを促進する開かれた住まいです。」

共同生活を希望する高齢者のための住まいです

12 グループリビング

基本的なサービス



<住まいの概要>

グループリビングは、10名程度の少人数で共同生活する住まいです。住宅内では、お互いの自由を尊重しながら、家庭的な雰囲気ですぐに暮らして営みます。運営者側が生活者の暮らしを一方的に決めるのではなく、生活者が自らの意見を運営に反映できる自由度の高さが特徴です。

居住者一人ひとりが社会の構成員でありつづけられるように地域や人との繋がりを促進する地域に開かれた住まいです。

<対象者>

身の回りのことができるおおむね60歳以上の方です。

<運営主体等>

特定非営利活動法人等が運営を行っています。

<費用>

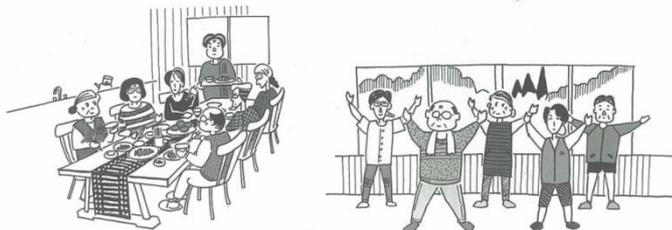
・家賃、共益費、食材料費、家事労働費(食事作り、共用部分の清掃等)

<市内住宅一覧>

別冊をご覧ください。

<申込方法>

入居を希望するときは、入居を検討している住まいのサービス内容を確認した上で、直接お申込みください。



高齢者の住まいを選ぶ

COCO 宮内の1日の様子を紹介したいと思います。

寝覚めはまちまちです。早い人の中には皆様がいらっしゃるバス通りの溝の口に向かって左側に二ヶ領用水という農業用水があります。朝早く散歩に行かれる方もいらっしゃいます。

廊下は冬場、早朝、床暖になります。心地よく部屋から出て生活していただけるようになっています。洗濯機の使用は午前7時からとなっています。

次は朝食風景です。Nさんはいつも健康的な食生活をされています。みなさん色々でしっかり作る方もいらっしゃいます。



次は清掃です。毎日 1 時間半しっかり清掃する場所と、月水金に清掃する場所、火木土に清掃する場所があります。きれい好きな人たちがやってくれています。10 年経っていますが、本当にそんなに経っているのですかと言われていました。私たちの年代はちょっときつくなってきたので、清掃チームは若い 30 代から 40 代のメンバーで行っています。

入居者の皆さんは掃除が始まったころから、買い物に行ったり、趣味をしたり、室内の用事をしたりしています。

これはアトリエ 2 1 の口座の 1 つのコーラスです。メンバーは 25~26 名です。私も含めてババサンコーラスです。この前、沼田さんがお泊りになり、歌を聴いて「皆さんお上手ですね」と言われました。発表は「COCO に行こう！」という全館のイベントの時に、紺のスカート、白いブラウスで行っています。毎回練習のお茶飲みタイムではお茶出し、お茶碗洗い、謝礼の集金とか、係が決まっています。皆さんでやっています。お茶やお菓子はみんなで持ち寄ってやっています。



朝食

掃除

コーラス

これは昼のランチ風景です。食事に関して、朝は自分で、昼はカフェで、夜はリビングで行います。どう違うかという、テーブルの幅です。そこに大きいテーブルがあります。その幅のサイズで前の人と話すのは距離があります。ここは距離がないので夕食ででない話題が出ているような気がします。火曜と金曜には若いお姉さんがボランティアでピアノを弾きに来てくれるので仲良しになったりしています。カフェはテラスについては犬 OK です。後はちょっとうるさくなる子供、子育てサロンの後にここに寄る人が増えています。

午後もいろいろな事をするのですが、これは COCO 宮内の名物体操、COCO 体操です。近所の人達も数名みえています。ただ 2 人とも今故障して入院したり、退院したばかりで、住まいの中の人だけになっています。2 時頃からお風呂に入ります。大きなお風呂を希望す

る人、個浴を希望する人に分かれています。

夕食は 4 時頃から作る人が来ます。これが夕食の風景です。

夜道路から窓をみると、遅くまで照明がついているところと早々寝られる方もいらっしゃるようです。

これが COCO 宮内の 1 日です。



カフェ BE BORN でのランチの様子



カフェ BE BORN の親子



COCO 体操（リビングで）



浴室



食事作り



夕食の様子

次は 1 年の様子について話します。

これはおせち料理、食事メンバーの 2 人の方が大晦日の日、全部作ってくれます。元旦の 10 時から、ここにいる若い男の子がいますがこれはうちの息子たちですが皆さんにサービスするために元旦の 10 時から原家と合同で新年会をやります。ここでは御猪口いっぱいのお酒も飲みますし、今年の抱負も一人ずつ話しています。

春近くになりますと、リビングの和室でお茶会をします。宮内に住んでいる先生の社中の方が皆さん着物勢揃いで来られます。入居者の方もご自分で着れる方もいらっしゃるの、その日は皆さんおしゃれして来られます。

これはそこのテラスから見物できる東京の世田谷区と川崎市、2 ヲ所同時開催の花火大会です。



新年会



お茶会



花火大会（テラスから見物）

これが先程言いました「COCO に行こう！」という会です。これは川崎市から高齢者住宅を地域に紹介してくださいと言う話がありまして、毎年開催しています。これはバザーの売り場です。その他にコーラス、ギターの発表をします。またじゃんけんゲームなどを行っています。アトリエでは、短歌の他、展示発表、ハーブティーの無料サービスなどがあります。

これは敬老会です。川崎市から敬老会も地域の独居の人を含めてやってくださいと言う話でした。40 人ぐらいの方でしたので、とてもじゃないので、お弁当を買おうと思いましたが、川崎市からそのお金は手作りですと支払われますと言われたので、松華堂弁当を手作りすることで始めました。それが始まりで毎年手作り弁当 40 食、ここで作っています。自分達も近づいたので一緒にお祝いしています。入居者の方がフラダンスをやって下さったり、仲間の大正琴のメンバーが来て弾いてくれたりしています。

これは消防訓練です。前の市営住宅、ガーデン桜のデイサービス、2 棟全館みんなでやっています。毎年消防署の人が来てくれていましたが、今年は来られませんでした。消防署の方には熱心にやっていると思われています。



COCO へ行こう！



大正琴の演奏会



消防訓練

これは勉強会です。介護保険とはどうなのとか、最近では遺言の書き方、文化的に生きるなどです。これは川崎市の看護協会の会長の手島さんです。

これは大掃除です。メンバーの有志の方、約 30 名ぐらいでお昼を食べ、親睦を図ります。これは餅つきです。大体 24 キロから 30 キロぐらいつきます。



勉強会



大掃除



餅つき

これはうちの娘の結婚式です。ここに関係する人が自宅でやったので、みんな来てくれました。来て欲しいと思ったので自宅でやったんです。小島さんがプロデューサーをやってくれました。ピアノ教室から子供教室、入居者、父兄の方、近所の人達。ここで地域が1つになっているな、という感じを受けました。



結婚式



結婚式

地域の皆さんとの関わり

- ・ アトリエ21講座(趣味の教室)
- ・ カフェ Be Bornの利用
- ・ 1年の行事を通して
- ・ 自発的な講座の開催(編み物、フラダンス、料理)
- ・ COCO体操
- ・ 自治会との関わり
- ・ 他のグループとの関わり(ゴミ箱の会、生協、マイコミュニティー)

次は暮らしの特徴です。地域との関わりが多い。これはグループリビングの特徴なので、みんなどこでも地域との関わりが多いと思いますがCOCO 宮内ではどういう風に関わっているか、先程のアトリエ21の口座は13ありますが、地域の人と、入居者とアトリエで交流し、そこで新しい友達が出来ることがあります。

カフェ BE BORN はここで昼食を食べます。そうすると富士通やキャノンの社員の方、

中小企業の方も来られます。子連れのお母さん、犬連れの人などと、ちょっと触れ合うことができます。

アトリエ21とは別に入居者の方が編み物教室をやってくれたり、フラダンスの得意な方が教室を始めたりしました。料理の上手な方がメンバーに入り、太巻きを教える会をし

ました。先日はクリスマスが近いので、クリスマス料理の教室をしました。連鎖的に料理教室が始まっています。入居の方と地域の方が集まってやっています。

自治会との関わりはあまりないのですが、敬老会の時の祝いをいただいたり、回覧版をまわしたりしています。

他のグループとの関わりです。ごみ箱の会というがあります。ここのごみを捨てるときに、向かいの高齢者市営住宅のごみ集積所に捨てています。市営住宅が出来るときに、この周辺に建売で家を買った若い家族がごみ集積所を清掃する代わりにゴミを捨てさせて、ということになりました。60世帯がごみ箱の会に入っています。月に1回清掃すると間に合うんです。COCO 宮内でも代表の人が清掃日には清掃しています。

それから買い物ですが、皆さん、重い物は持って帰りにくいので、生協で買い物をしている人もいます。

マイコミュニティというのはメンバーで塾をやっていた方が大学院で生涯学習と言うテーマで研究し、それを実践されています。ハーブ教室など、このメンバーもこれにはまわっていて、楽しみに通っています。

近くにグループホームがあるのですが、空地に畑を作りたいと携わる人を探していました。私たちの仲間が畑や花壇を作り、メダカを飼っており、とても喜ばれています。これが地域の関わりです。

サポートスタッフとの関わり

- ・ 食事メンバー … メニュー作成 返金の計算
- ・ ライフサポーター … 窓の開閉 空調の調節
- ・ 清掃メンバー … 植物への水やり
- ・ その他、自主的な行動 … 外出の企画

委託業務に対して、託した、託された関係ではあるが、友人とか仲間としての意識を持っている。

次はサポートスタッフとの関わりです。サポートスタッフは入居者が、業務委託をした人たちです。託した、託された、の関係ではありますが、最近は友達とか、仲間としての意識に変わってきたと思います。

食事に関してはメニューの作成に入居者2名の方が関わっています。食べなかった分の返金の作成も入居者がしています。ライフサポーターの関わりとしては主に夏ですが、早目に窓

を開け、いい空気を入れるとか、寒い時に食事当番が来る前に空調をいれておいてくれます。部屋は全部南向きで朝から暖かいのですが、廊下からこちらは北側なので、床暖房をその前につけてくれる役目をしていただいています。またそのテラスはとても綺麗だったと思いますが、入居者が植物への水やりをしてくれています。

その他、数年前から、外出の企画でイルミネーションやコスモスを見に行こうとか、ライフサポーターのメンバーが友達として、一緒に外出したりしています。

子どもとの関係

COCO宮内の暮らしを支える取り組みに触れることによって

子どもたちはその体験により、
思いやりや
やさしさや
支え合いを学んでいる。

子供との関係について。ななちゃんと言う小学4年生の子がいました。COCO宮内を学校で発表したいから、教えてと言われました。ななちゃんレポートとして大事にとってあります。

COCO宮内にはわりかし元気なお年寄りが住んでいますが、その中の多くの人は

もともと一人暮らしです。一人暮らししていると不安、相談相手があまりいない。簡単な掃除は出来るけど、高いところやトイレ、ふろ場の掃除がたいへん、買い物で重い物を持つのはたいへん、買い物で一人分のものを買うのは不経済、病気になって支えてもらう人がいない場合が多い。一人の寂しさを味わってしまう寂しさ、苦しさ。1人暮らしで1ヶ月一度も会話をしなかった人の割合は50%。働いている人や住んでいる人10人はグループリビングをすることで得られるものがたくさんあります。近所のお母さんたちは食事作り、掃除、生活支援、これらをまとめる人達。いろいろいます。この子はここが出来た時に生まれた子なんです。最初は赤ちゃんで入居者の人の部屋に行っている間にお母さんがここで働いている時がありました。今日案内に男の子が立ってました。あの子は大掃除の時に手伝いに来てくれました。今日は来ていませんが掃除を手伝ってくれる3人兄弟がいます。このように日常的に関わるって大事ななと思います。前はそろばん教室の子供が騒いでいることがありました。ここはケンカするために集まっているのではない話をしました。「仲良くしていい気持ちになって帰るところだから、営利事業ではないのでよく理解してください」。よく理解してくれました。静かに学習するようになりました。子供は私たちの後継者なので、大事にしたいと思います。最近ジーンときた作文がありましたので読ませていただきます。

「ゆらゆらゆら、ドドドド、がしゃーん、家の中がぐちゃぐちゃになった。お母さんは私と妹を守ってくれた。私たちは怖くて、怖くて、家が壊れちゃう。立つことができない。長い地震だった。2年前幼稚園の卒園式から帰ってきた時だった。お父さんが隣の家の人に、中学校で水がもらえるという話を聞いてきて、私とお父さんとお姉ちゃんの3人でバケツやペットボトルを持てるだけ持って出かけた。その途中で、私の前を歩いていた小さい二人の子とお母さんが袋を持って歩いて来たおばあさんに小学校で非常食が配られていましたが、まだ配られていますかと聞いていた。おばあさんはいっぱい人が並んでいて、ちょうど私の後ろで終わってしまったのと言った。それを聞いていた小さい子たちは下を向いてしまった。そしたらおばあさんがよかったらこれどうぞと小さい子にもたせてあげた。そのお母さんは何度も頭を下げて嬉しそうだった。おばあさんも長い時間並んで、お店だって、いつ開くかわからないのに、偉い人だねと言った。私は自分がたいへんな時におばあさんみたいにできないよ。すごい人だと思った。それから私たちが中学校に着いた時、水をもらおうといっぱい人がならんでいた。私はお父さんに、いっぱいもらっちゃう

と後ろの人たちがもらえないかもしれないね、と言った。そしたらお父さんは、それではこのバケツだけに入れてもらおうと言い、私たちはそうすることにした。水は少しだけだったけど、何だか私の心の中は暖かいものでいっぱいになった。」

これは2年生です。子どものうちに、こういう心を育てていくことが、成熟した人間社会を作り上げていくために不可欠だと思います。グループリビングは人々の熱心さで作り上げている部分があるので、こういうことを大切にしていける事が重要だなと感じたので、このページを作りました。

子どもも大人も老いも若きも、地域の中で自分のやれる事(能力)を積極的に出し合っていく。

入居者も地域のメンバーの一人として、生活していく。

それが、COCO宮内での暮らし。

COCO 宮内のまとめをします。

子供も大人も地域の中で自分のやれること、能力を積極的に出し合っていく。入居者は地域のメンバーの一人として生活していく。それが COCO 宮内での暮らしと思っています。

どうもありがとうございました。

新座ワークショップ

グループリビングという住まい方 —有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅との比較から—

立教大学大学院 コミュニティ福祉学研究科

星野 友里

<p>グループリビングという住まい方 —有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅との比較から—</p> <hr/> <p>立教大学大学院 星野 友里</p> <p>1</p>	<p>本日の構成</p> <ol style="list-style-type: none">1. はじめに2. グループリビングとは何か3. グループリビングの特性（他との比較）4. グループリビングの現状と課題5. 今後の展望 <p>2</p>
<p>1. はじめに 自己紹介</p>  <ul style="list-style-type: none">・立教大学大学院 コミュニティ福祉学研究科博士課程後期課程在籍中・専門領域は地域福祉と高齢者福祉・近年はグループリビングに興味関心を抱く・2010年秋より「えんの森 開設検討委員会」に加わる・今年度は日本各地のグループリビングへの訪問に力を入れている <p>3</p>	<p>問題意識</p> <ul style="list-style-type: none">・ひとり暮らし高齢者の増加・「自宅、施設以外の多様な『住まい方』」 <small>(高齢者介護研究会2009)</small>の必要性を感じた ちよっとの手助けがあれば、自宅での生活が継続できる人がいる <p><small>【出典】高齢者介護研究会（2009） 「2015年の高齢者介護—高齢者の介護を支えるケアの確立について—」</small></p> <p>4</p>

まず、簡単な自己紹介から始めたいと思います。私は、立教大学大学院の博士課程に在籍している者で、大雑把にいうと、地域福祉や高齢者福祉を専門としています。グループリビング関係は建築の方のほうが多いようですので、私は、社会福祉学という、もしかするとちょっと違った立場から、グループリビングについて研究をさせていただいています。

こちらでは、2010年の秋より「えんの森開設検討委員会」の一人としてお世話になっています。立教大学といいましても、コミュニティ福祉学部は新座にあるもので、小島さんには、しばしば大学の講義にゲストスピーカーとしてお越しいただいています。えんとの出会いは、私の、前の前の指導教授に紹介してもらったのがそもそものきっかけで、それから、記録係も兼ねながら、修士論文を書いたり、その他の論文を書いたり、追いかけていただいています。

また、スライドにありますように、今年度は他のグループリビングの訪問にも力を入れていて、ありがたいことに、本日お越しいただいている方の何名かにも、既にご協力いただいています。もし、「うちにも是非」という方がおられましたら、訪ねて行きますので、どうぞお声掛けください。その代わりにいっては何なのですが、私の方も、これまでの研究成果をいくつか持ってきていますので、言っていただけたらお渡しします。

主とする問題意識はこの 2 点です。皆さんもご存じのように、当面はひとり暮らし世帯の増加傾向が見込まれており、ひとりでの暮らしが難しくなってきたとき、どう対処していくのかということがあります。従来だと、「自宅か施設か」という二択が主流の中、自宅で無理を重ねるのも、いわゆる「施設」という所に移って、急に何もかもを他の人に委ねてしまうのも、どちらとも、それでいいものなのかと疑問に感じていまして、他の選択肢、具体的には、ちょっとだけ、自分にできないことだけを手助けしてくれる所はないものかと考えたのが始まりです。実際、『2015 年の高齢者介護』でも「自宅、施設以外の多様な『住まい方』の実現」が一つの方向性として示されていて、例えば、本日も話をするような「グループリビング」もそれに含まれるだろうと見ています。

2. グループリビングとは何か
グループリビングの種類



- ・広義のグループリビング
 血縁関係のない者が集まって住んでいる形態
 → 相互の見守り
- ・狭義のグループリビング
 NPO法人COCO湘南を中心としたグループリビング
 JKA補助事業「高齢者生き生きグループリビング支援事業」（2005～2009年度）で一層の広まりを見せた
 → 「自立と共生」を目指す

5

ただし、一口にグループリビングといっても色々で、「グループリビング」についてははっきりと説明できるような方は、多くないだろうと思います。そこで、本題に入る前に、私なりにグループリビングについて整理をさせていただきます。

まず、グループリビングには、広い意味でのグループリビングと、狭い意味でのグループリビングがあって、このえんの森や、有名な COCO 湘南台の系列は、狭い方のグループリビングに位置付けられます。そうといたしますのも、確かに、「グループリビング・COCO 湘南台」を立ち上げ、それを世に広められたのは西條節子さんですが、その以前にも血縁関係のない人たちが集まって住んでいるような形態は、探せばぽつぽつと出てくるもので、それらも言ってしまうと、「グループリビング」に違いないのです。ただ、NPO 法人 COCO 湘南から生まれたグループリビングの運動については、単に一緒に住んで、お互いに見守っているだけに止まらず、「自立と共生」という理念の下に進められているのが特徴です。

今回は、この「自立と共生」のグループリビングに絞って話をしていきますので、右上の図に示したような、ほんの一部の話であると、あらかじめご理解ください。

「自立と共生」

- ・「自立」
 身体的自立ではない
 自己決定にもとづく精神的自立を指す
 ↓
 グループリビングはその集合体

6

さて、その重要概念、「自立と共生」についてですが、誤解されている方が多いようなので、私から補足をいたします。まず、「自立」は、「自分のことは自分でできること」、いわゆる「身体的自立」を指してはしません。体に良くないところがあっても、できないことがあっても、自分はどうしたいかと意思表示

ができればいいのです。すなわち、この「自立」とは、自己決定にもとづく「精神的自立」

を意味していて、グループリビングはその積み重ねによって成り立っています。

「自立と共生」

- 「共生」
住んでいる人同士の共生
➡ 互助的な関係を育んでいく
- 住んでいる人と運営者側、地域との共生
➡ 地域に開かれた場所になること

7

ただし、住人が一人ひとり好き勝手にしては、住人の輪は乱れに乱れます。ですから、集まって住むからには、ある部分はお互いに譲り合って、「共生」していくことも必要です。そうでなければ、介護施設でもなく、高齢者住宅でもなく、わざわざグループリビングへ越してきた意味がなくなりますし、う

まくいけば、いざというときにはお互いに助け合えるような関係に発展する可能性を秘めたものです。しかし、住人だけでそれが完結しては不十分で、運営者との関係はもちろんですが、よりたくさんの人の手を借りる必要が出てきたときや、何らかの理由により、住人を補充しなければならなくなったときのことを考えると、前もって地域に開かれた場所でなければいけません。また、建物の外部との接触を一切断ってしまえば、「地域で暮らし続ける」とは到底言えないものになってしまいます。そのため、ここは「住まい」であるという認識のもと、「入居者」ではなく「一個人」、さらには、「地域住民」としての振る舞いが当然求められます。

3. グループリビングの特性

• Point : **住人の意識**
そこに住んでいる人が、どういった意識をもって生活しているか

↓

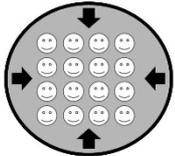
グループリビングは住人によって形作られる

8

そこで、私としましては、グループリビングについて考えるにあたっては、「そこに住んでいる人がどういった意識をもって生活しているか」が一番のポイントだと考えています。ですから、今回のテーマにある、有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅との違いは、まさしくこの点、「住人の意識」に尽きます。

先にも申しました通り、グループリビングは住人の自己決定が寄り集まってできているもので、運営者でも介護者でもなく、主に生活を形作っていくのは、そこで住んでいる人たちです。

3. グループリビングの特性
介護施設の例



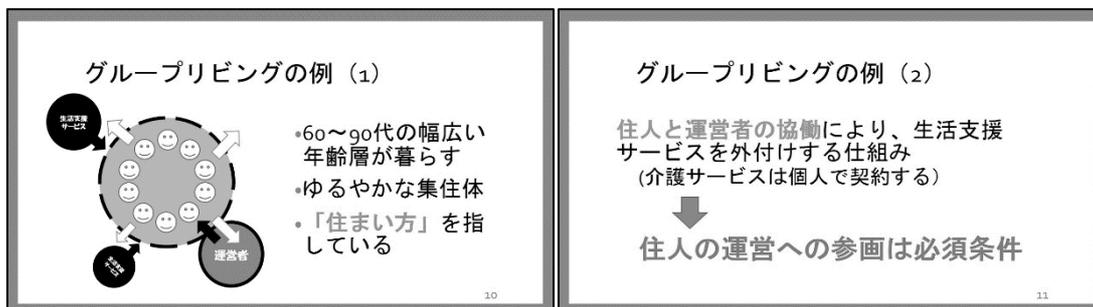
- 「お世話される存在」
- サービス提供者とサービス受給者の関係が固定化されがち
- 入居者（住人）が外へ出ていく機会が少ない

9

ここで、介護施設を例に挙げます。もちろん、お入りになっている方の身体状況による場所も大きいのですが、介護施設において入居者は「お世話される存在」です。そのため、サービスを与える人は与える人のまま、サービスを受ける人は受ける人のまま、両者の関係性は滅多に逆転することがありません。

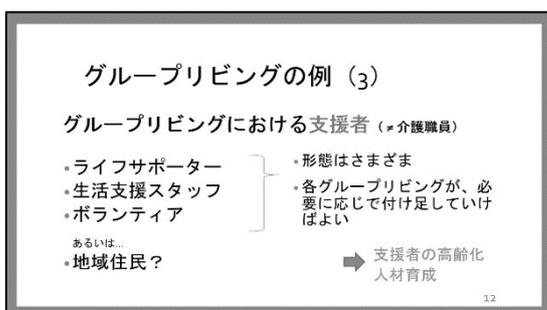
また、外出の自由が制限されている所も多いと聞きますから、一度そこへ入ると、

介護施設の決められた枠の中で暮らしていくことになります。



対して、グループリビングは介護を目的として入る場所ではありませんので、住人の年齢構成が60代から90代までばらばらです。そもそも、グループリビングとは「住まい方」を表している言葉で、「施設」のように決まった建物、あるいは、枠組みがあるものではありません。言うなれば、「自立と共生」という理念のもと、複数名が集まって住んでいるだけなので、当然、住人の出入りも自由で、この人のように、外へ働きに行っても構わないです。ここで、左の図について解説をしますと、あくまで方法論を指しているため、住人を囲む丸は、実線ではなく点線で表しています。そのすぐ横には運営者がいて、住人と運営者、両者の間では意見交換などがなされるので、矢印が双方向に伸びています。外付けの生活支援サービスについても、ただサービスを受け取るだけではなく、住人が物を申したり、手を貸したりすることを想定し、矢印は両方です。また、住人が個人的に外へ出ていくこと、発信することもあるので、右上の矢印も加えてあります。

こうして図で示した通り、グループリビングでは、生活支援サービスは外付けとなっています。それも、他の人が「これが良からう」と決めてしまうのではなく、自分たちの望む形のを、住人が運営者とともに選び取っていく方式です。なので、住人側にも、運営者側に任せきりにせず、運営へ参画していこうという気概が求められます。当然、大変な面もあると思いますが、この点がなければ、有料老人ホームとは違った暮らしには成り得ないと、私は考えています。



先ほど、「自立と共生」の「自立」は「身体的な自立ではない」と話しました。自分のことを全て、自分でマネジメントできるうちは、ひとりで自宅にいれば済むことです。ただ、いくつか不具合が生じている、あるいは、その恐れが出てきたからこそ、グループリビングへやって来たわけなので、住人だけでは回らなくなったとき、そこでの生活をアシストするような方が出てきても、私は一向に構わないと思っています。COCO 湘南のように、ライフサポーター制を布いてもいいですし、他にも、生活支援スタッフ、ボランティアなどと、形態はグループリビングによって色々

だと思います。

ちなみに、これに関して、今、見えている課題としては、当たり前といえば当たり前ののですが、住人と一緒に支援者も歳をとるということが出てきていますので、グループリビングの継続的な運営にあたっては、次を担う人材の育成もあわせて必要ようです。

3. グループリビングの特性 ① 小規模 -1	
グループホーム (1ユニット分)	5~9名
グループリビング	10名程度
サービス付き 高齢者向け住宅	31.8戸
住宅型 有料老人ホーム	28.0戸

両者では住人の属性が異なる

3. グループリビングの特性 ① 小規模 -2	
小規模のメリット	
• 家庭的な雰囲気	
• 「なじみの関係」が築きやすい	
• 住人の意見が運営に反映されやすい	



【出典】高齢者住宅財団（2023）『サービス付き高齢者向け住宅等の実態に関する調査研究』

それでは、いよいよ、本題の中の本題に入り、グループリビングと他の形態との違いについて、具体的に見ていきたいと思います。まず、左の表にある通り、グループリビングがきわめて小規模な住まいです。平均戸数でいうと、サービス付き高齢者向け住宅や有料老人ホームといったものの3分の1程度しかありません。

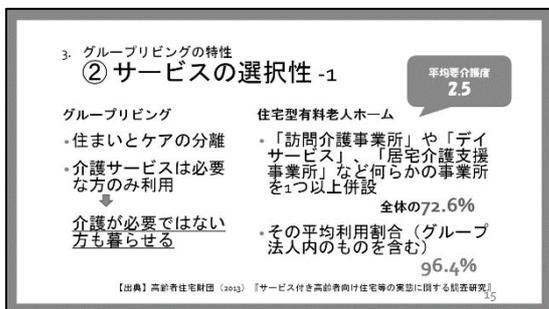
また、グループリビングとしばしば混同される「グループホーム」については、人間の数は大差ないのですが、住んでいる人の属性が根本的に異なります。皆さん、ご存じのように、グループホームは「認知症対応型共同生活介護」という名前が示す通り、認知症の方を対象とした介護の場所です。なので、名前は似ていますが、グループリビングは介護を目的としたものではないので、全くの別物だにご理解ください。

小規模のメリットとしては、まず、「家庭的な雰囲気」が作りやすいということが挙げられます。ただし、これはあくまで「家庭『的』」ですので、住人は家族であるとか、家族がしたくてグループリビングに集まってきたとか、そういった考えは、ちょっと無理矢理だろうと思っています。例外もあるでしょうが、グループリビングの住人同士は結構ドライな付き合い方をしているので、一緒に食事をするくらいの「なじみの関係」に過ぎず、「家族」も「友人」もグループリビングの外にいます。「何をするのも一緒」だと、かえって人間関係がこじれかねませんので、このくらいの付き合いのほうが、私はいいと思っています。

あとは、繰り返しになりますが、住人が運営に関与しようとしたとき、規模が小さい方が当然意見も反映されやすいですし、小さいから、住人も把握が可能だといった見方もできます。

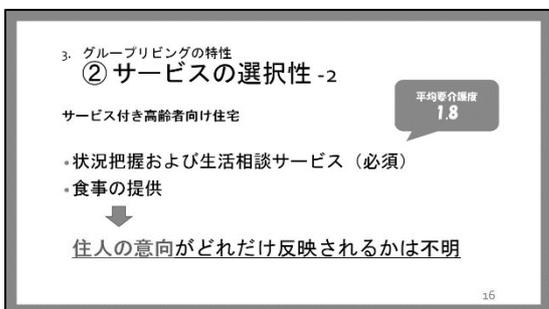
2点目としては、サービスの選択性が挙げられます。生活支援サービスはさて置き、住まいがあって、介護サービスは個人契約という方式は、実は、住宅型の有料老人ホームと同

じなんです。なので、グループリビングでも、住宅型有料老人ホームでもいいんじゃないのかって思われる方がいるかもしれませんが、やはり2つは違うと、私は考えています。

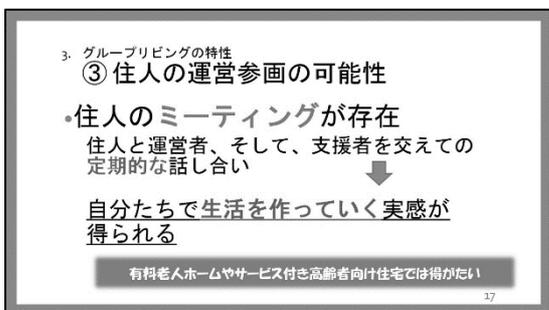


ホームや旧高専賃なら比較的建てやすかったということがあります。元々は、介護型有料老人ホームをやりたいかのような所からすれば、自分たちのサービスを契約するよう利用者に促すのは、当然の成り行きです。

それに、平均要介護度 2.5 とあるように、お入りになっている方も、介護を目的としてそこへやって来ている節があります。一方、グループリビングはというと、正確な統計をとっていないので、はっきりとは申し上げられませんが、住人の中には、介護度の付いていない方も少なくありません。これは、介護が必要ではなくても、気兼ねなく住めるということの裏返しでもあります。



うような、そうした小回りは利きづらくなっています。

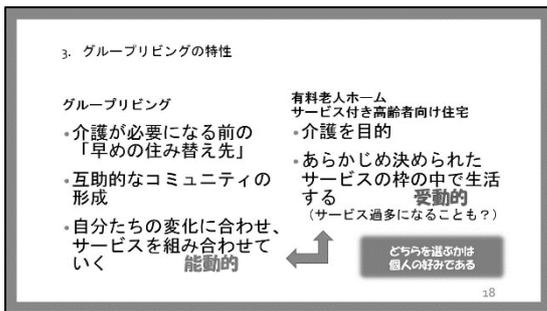


で生活を作っていく実感」が得られるはずで。これが、有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅といった、運営者が何かとお膳立てしてくれる住まいとは違うところです。

そうというのも、高齢者住宅財団の調査結果にあるように、住宅型の有料老人ホームといっても、結局は法人内のサービスをほとんどの方が利用していて、表向き、形だけが別になっているからです。その背景には、2006年の介護保険の改正によって、介護型の有料老人ホームの総量規制が行われ、住宅型老人

また、サービス付き高齢者向け住宅に関しては、状況把握や生活相談、食事の提供といった生活支援サービスが付属していますが、言ってしまうと、それは住人自らが選んだものではないのです。先に示したように、30戸規模の住まいですから、一人ひとりのニーズをくみ取り、サービスに反映させていくとい

本来、グループリビングには、住人のミーティングというものが存在します。連絡事項の伝達の他、生活上のあらゆることに関して、ああしよう、こうしようと皆が集まって意見を出し合う場です。不定期の開催だと、なかなか難しいかもしれませんが、少なくとも、定期的にそれを繰り返していけば、「自分たち



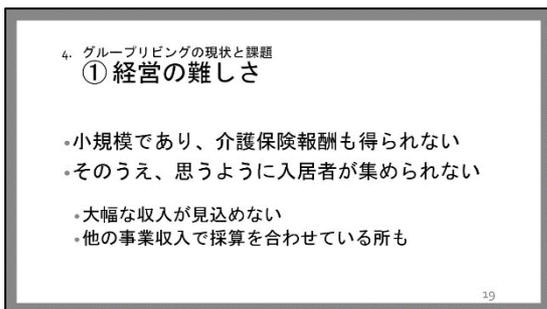
一度、今までの話を整理します。

まず、有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅では、そこへやって来た目的が異なります。有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅が、介護に重きを置いたものだとすると、「早めの住み替え先」という言葉が示すように、グループリビングはその前の段

階から始めて、そうした人たちで互助的なコミュニティを作りながら、介護が必要になったときに備えていくものです。

つぎに、有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅では、あらかじめサービスのメニューが決まってしまうがちで、下手するとサービスが多過ぎることもあります。グループリビングの場合、何より小規模なので、一人ひとりの状況の変化に応じて、サービスを付け替えたり、付け足したり、少しずつ変えていくことができます。もちろん、そのためには、お住まいの方自身にも「自分はこうだ。こう考えている」というように、能動的な関わり方が求められます。

ただし、これは、グループリビングは良くて、有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅は悪いという話ではありません。有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅の方が向いているという方も少なくないでしょうから、詰まるところ、どちらを選ぶかは個人の好みだと思っています。誤解のないように、あえて言っておきますが、私は、グループリビングが全てのお年寄りに対して有効だとは全く考えていませんし、むしろ、向き不向きのかかりははっきりした住まい方であると見ています。



ここまで聞くと、グループリビングが嫌になってしまった方もいるかもしれませんが、本当に、グループリビングの運営は一筋縄ではいかないようです。これからは、私が日本中のグループリビングを見てきて、感じた、グループリビングの現状と課題について、掻い摘んで話をしていきます。

まず、これはすぐに想像できることだと思いますが、規模が小さい分、大きな利益は見込めません。介護サービスが付いているわけではないので、介護報酬も入ってきませんし、そのうえ、「土地所有者に月々の費用を払わなければいけないけれど、思うように住人が集められない」ということになれば、非常に経営が難しくなります。なので、その分を他の事業収入で補填しながら、何とかやっている所もあるようです。

4. グループリビングの現状と課題
② 人間関係のややこしさ

- ・住人同士の距離の近さが、思わぬトラブルを引き起こす一因にもなっている
- ・旧住人と新住人のあいだに力関係が生じる
- ・「大丈夫です」や「(困っていることは) 何ともありません」といった言葉の真意

20

4. グループリビングの現状と課題
③ 住人の運営参画が進んでいない

- ・ミーティングの消失や形骸化
住人から意見が出されない
- ・住人の多数が認知症を発症するケースもあり
ミーティングの実施が難しくなる?

21

また、中は中で大変です。意識的に距離をとっていても、どうしても、トラブルが起きることはあります。なかでも、グループリビングに新しい住人が加わったときは注意が必要で、よくあることですが、何せ、新入りは勝手が分からないので、古株の言うがまま…という事態も起こりえます。人によっては、「それは違う」と反論できる方もいるでしょうが、大半の方は、「これから一緒に暮らすんだし…」と自分の考えを押し込めてしまいます。何しろ、長年の知恵なのか、皆さん、穏便に事を運ぼうとし、「自分が我慢すればいい」というわけなのか、皆の前では「大丈夫です」や「何ともありません」と発言を控えることがあるようです。でも、本当はそうではなくて、個人的に話を聞いてみると、「いや、実は…」ということも決して少なくありません。

こういうわけで、まるで話し合いにならないと、ミーティングがなくなってしまったり、あっても形だけのものになってしまっていたりする所が、かなり多くなっているのが現状です。

また、「グループリビングは介護施設ではない」と申しましたが、住人の多数が認知症を発症し、ミーティングどころではなくなっている所もあるようです。グループリビングの自立は自己決定に基づく自立だといっても、認知症の方のそれとなると、専門職のあいだでも見解が分かれる部分ですので、グループリビングにおいても、今後検討を重ねていくべき点だと考えています。

4. グループリビングの現状と課題
④ 高齢期の住まいとしての立ち位置の曖昧さ

<p>介護が必要な方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループリビングでは24時間の対応が難しく不相当 	<p>身体的に自立した方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住み慣れた自宅から離れたがらない ・将来、介護が必要になったときのことを考えると、グループリビングでは不安
--	--

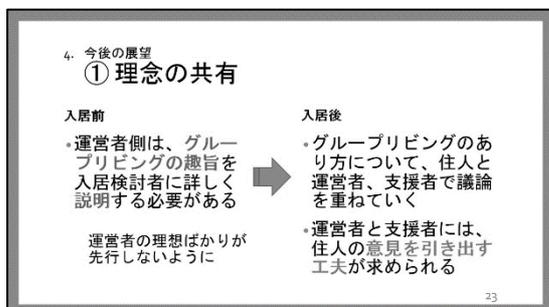
どちらの層にもうまく合致しない!

22

このように、認知症になったときの対応もそうですが、グループリビングには「高齢期の住まいとしての立ち位置の曖昧さ」が常につきまとっているようです。繰り返しになりますが、グループリビングは介護施設ではないので、24時間の介護を必要とするような方は、そうそう選ばない所です。

しかし、だからといって、「早めの住み替え」の方がいらっしゃるかといえば、限界まで住み慣れた自宅で暮らすことをほとんどの方が希望します。持ち家があると、その傾向はますます強くなります。加えて、「介護施設にらず」では「それなら、介護が必要になっ

たらどうするの？」と不安に思い、よしておこうとなるわけです。なので、介護が必要な方にも、身体的に自立した方にも、なかなか選ばれないという状況があります。

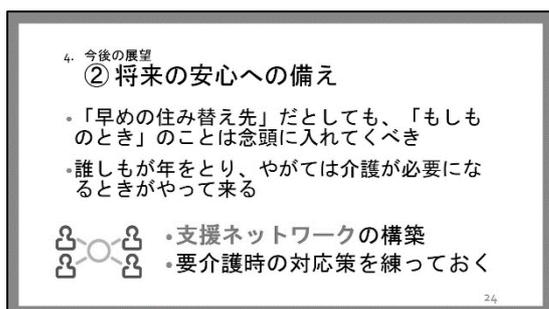


以上を踏まえまして、今後の展望、こうしたらいいのではないかと、僭越ながら申し上げます。

1 点目は、理念の共有です。本講演の中で何度も強調してきたように、グループリビングは住人の意識によるところが大きい住まい方です。ですから、運営する側は、入居検討

の段階で、グループリビングの趣旨を詳しく説明する必要があると考えます。この話になると、「そんなことを言っていたら、人が集まらない」とのご意見もいただきます。その通りかもしれませんが、やはり、その先のことを考えると、事前の説明は必須であるように思います。ただし、このとき、運営者の理想ばかりが先行すると、かなり対象者の枠を狭めてしまうことになるので、ある程度は柔軟性が必要です。

また、それは入ってからと同じで、運営者が「こうなりたい」を追求するあまり、住人にそれを押しつけてしまつては、本末転倒になりかねません。あくまで、そこに住まうのは「運営者」ではなく「住人」ですので、住人の意向に沿うのが一番です。そのため、運営者は明確なビジョンを持つべきですが、運営者や支援者は、調整役に回るのがいいと思っています。具体的には、住人が意見を出しやすいように、話題を提供したり、話を振ってみたり、はたまた、冗談を言って場を和ませたりなどがあります。



2 点目は将来の安心への備えです。つい先ほど、現状と課題の部分でも触れましたが、グループリビングはこの点が弱いです。「早めの住み替え先」であるには違いないのですが、「もしものとき」のことを考えなくていいというわけではありません。年をとれば、初めは介護がいらなかった方も、やがてはその必

要が出てきます。そのとき、長年お住まいだった方が、グループリビングを出ていかざるを得ないというのはあまりに酷で、断じてあってはならないことです。なので、「もしものとき」に備えて、運営者側は、支援ネットワークを前もって構築し、要介護時は「こうしたり、ああしたりできる」というように、対応策を何種類か練っておく必要があります。

5. 今後の展望

**グループリビングが自宅と介護施設の
中間施設にならないように**

25

本日は、有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅との比較を通して、グループリビングという住まい方を見てきました。その特徴としては、「住人の意識」、能動的あるいは当事者としてのグループリビングへの関わりがあります。そう言うと、グループリビングは心身のしっかりした方が対象で、所詮は介護施設への通過点に過ぎないと解釈されがちです。しかし、目指すところは、介護の必要の有無にかかわらず、できるだけ長く住み続けられる、自宅同様の住まいです。そのためには、住人は、内部、住人同士の助け合いのネットワークを作り、かたや、運営者や支援者は、グループリビングと外部とのネットワークを作るといのように、内外に支援のネットワークを張りめぐらせていく必要があります。是非皆さんのお力も貸してください。

ご静聴ありがとうございました

本日の講演にあたっては、複数のグループリビングにご協力をいただきました。
ご多忙中、貴重なお話を聞かせてくださったことに改めて御礼申し上げます。
なお、本講演は2013年度「立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）」の助成を受けて実施した研究成果の一部である。

26

本日は、ご静聴ありがとうございました。

新座ワークショップ

暮らしネット・えんがグループリビングを創った理由

暮らしネット・えん代表理事 小島 美里

障がいがあっても 高齢になっても
地域で暮らし続けるために



NPO法人暮らしネット・えん

これから、「暮らしネット・えん」が、この「グループリビングえんの森」を作るまでと、そして、たった2年の経験なんですけれども、その中で経験したことを、星野さんのご指摘を踏まえて、お話をしたいと考えています。

暮らしネット・えんのこれまで

1990前後	全身性障がい者2人の介助ボランティアとしてスタート
1996. 4	堀ノ内病院在宅介護部門開設
2000. 4	介護保険スタート
2003. 2	NPO法人暮らしネット・えん設立
2004. 4	ケアサポートえん、デイホームまどか開設
2003. 6	暮らしネット・えん建物着工
2003. 10	ケアプランえん開設
2003. 11	暮らしネット・えん建物完成
2003. 12	グループホームえん開設
2004. 1	デイホームえん開設
2007. 2	多機能ホームまどか開設
2009. 11	毎日介護賞グランプリ受賞
2011. 9	グループリビングえんの森開設
2013. 5	配食サービス部門開設
2014	認定NPO取得予定(仮認定取得済み)

「えんのこれまで」と言いましても、20年以上さかのぼってしまっていて、いたっています時間ではとてもお話ができません。二十数年前にボランティアグループとして建ち上がっています。障がいのある方たちの、当時はあまり支援制度がしっかりしていなかった頃に、ボランティアの介助者としてグループを結成して、活動してまいりました。1990年ごろから6年間ですね。その間に高齢化社会への備えでヘル

パー派遣が大分増えてきました。でもそれは、月曜日から金曜日の9～17時だったんですね。「その他のところは全部ボランティア」という状況で、土日ですとか、夜ですとか、早朝ですとか、年末年始といった公務員ヘルパーが休んでいる時間をボランティアが支えていました。6年、よく続けましたね。「これをボランティアで続けられる方たちがいっぱいいるんだったら、何かできるに違いない」と思ったのが始まりでしたね。ということで、1996年にまだNPO法人で介護ができる状況が作られていなかったの、近くの堀ノ内病院に入って、在宅介護部門を作っていました。最初は訪問介護から始めています。そこに、障がい、認知症の方たちとの出会いがあって、小さなミニデイサービスから始め、「いづれグループホームを」ということで、活動してきました。

その後、2003年にNPO法人暮らしネット・えんを作りまして、今年の4月で10年を迎

暮らしネット・えんの事業

- ☆相談して ケアプランえん(居宅介護支援)
- ☆訪問して ケアサポートえん(訪問介護)
- ☆通って デイホームえん(認知症専用通所介護8人定員)
- ☆暮らして グループホームえん(9人定員 1ユニット)
- ☆通って泊まって訪問して 多機能ホームまどか(小規模多機能居宅介護 登録25人)
- ☆お出かけ 移送サービス事業
- ☆地域と共に バザー、お花見、地域福祉会議との連携
- ☆文化事業 高齢者のためのコンサート、こもれびコンサート
- ☆共に学ぶ 認知症地域家族会、インターンシップ・各種研修
- ☆住まって グループリビング事業
- ☆食べて 配食サービス事業

えています。

この暮らしネット・えんを作るときに、グループホームと、小規模な認知症のデイサービス、訪問介護、ケアマネ、それから、法人事務局が入った建物を借家という形で作っていただいて、スタートしました。暮らしネット・えんの活動は、今日のタイトルそのままなんですけど、この地域で暮らし続けるためには何が必要なんだろう、

私たちがこういう制度にのったもの、のらないものを持っていることによって、ちょっと楽に、この地域で暮らせることを作りたいというふうに考えてきましたという話です。

暮らしネット・えんの日々 グループホームえん・多機能ホームまどか 全景



2007年には、小規模多機能型居宅介護という利用者にとっては使い勝手がいいんですが、運営側にとっては、こんなにシビアなサービスはないという、訪問も泊まりも一箇所という所も始めました。先日、高砂のワークショップに行く途中で携帯が鳴りまして、多機能ホームまどかの方から連絡が入りました。スタートしたばかりの方が、今日訪問で行って見たら、冷たくなっていた。始まって12日目の死で

した。ようやく入ることを許してくれてというところで、これからだったのに、発見者になった若いスタッフも大変落ち着いて対応してくれていました。本当に、ただならない社会が既にやって来ています。今利用者総数は三百名を超えていますから、毎月一遍ぐらいは、びっくりするようなことが起きます。でも、だんだん驚かなくなっている自分が怖くなっています。

そういう中で、ある意味、このグループリビングえんの森というのは、私たちにとっては「のどかな選択」だと思っていました。まだ、先ほど星野さんがまとめてくださったように、色々な意味で「自立」されている方たちが入ってきて、ある意味「優雅な生活」。現在の入居者のうち、まだ働いてらっしゃる方が3人、お一人は夏に体調崩されてしまって入院、その後、老人保健施設に入られて、いずれお帰りになってらっしゃるのかなというふうに思っていますが、その方がお帰りになったときに、どんなことができるのか、また私たち、グループリビングえんの森にとっての、一つのステップアップになるかなと考えています。だから、どういうふうに介護を提供すればいいかなという方から、「夜遅く帰ってきて、朝早く出ていく。でも、ここに帰ってくると、お風呂が用意されている。ご飯も

できる。たまには、皆とお話することができる。それが幸せ」というふうに仰っている方までいらっしゃるという、ある意味とても優雅な、そういう意味では、良い所なんです。

ここのグループリビングえんの森まで、えんは6つの事業を持つことになりました。それまでの5つは法制度に乗ったものです。グループリビングえんの森が初めて、「法制度の外」の事業となりました。で、実はこれ、サービス付き高齢者専用住宅に指定を受けるか受けないか、グレーゾーンのところではあります。グループリビングのお仲間のなかには、有料老人ホームの指定を取ったところもあるし、サービス付きの、高齢者専用住宅を取ったところもある。うちも、サービス付き専用住宅をもしかすると「取れ」って言われちゃうかなってところはある。あんなに右往左往している、高齢者の住宅政策に翻弄されたくないという思いもありましてまだ指定はとっていません。しかしながら、必要な方にとっては、「そんじょそこらのサービス付き高齢者専用住宅より、よっぽどしっかりしたサービス付けてやる」というふうに考えてまして、実際にそれは今のところできていると思っています。「サービス付き」というと、何かありそうなんですけど、「実際入ってみると、サービス何もなかった」という話もよく聞くんですね。そういうことがないよというところは覚悟の上でやっています。それが6つ目のグループリビングです。

で、最近、今年の5月から、「食事サービス えんの食卓」を始めました。グループホームや小規模多機能、デイサービス、それから夜はこのグループリビングの住民の方に食事を提供しつつ、地域の方々に配食サービスを行っています。これは、びっくりするぐらい早く登録者数が増えていきました。5月に始まって、あっという間に1日40人。1日40人っていうのは、大体80人ぐらい登録者がいないと、1日30~40人にならないんですね。毎日皆さんが注文するわけではないので、やはりそれだけ必要なんだって。食事一食でもって命を繋いでいる方たちを見ている。そんなところで、7つ目のサービスが配食サービスということになりました。これが私どもの、今のところの全サービスにあたります。

暮らしネット・えんの日々 グループホームの台所で



これはとても早い時期のグループホームの写真ですね。グループホーム始まった頃は、こういうふうにまだ食事の準備を手伝ったりすることが可能でしたけど、あっという間にそれができなくなっていきました。高齢者の方たちとお付き合いしていると、「3ヶ月前まではね」というお話になるんですね。本当にそれは早いです。3ヶ月前か、昨日できたことが明日にはできなくなっている

ってということを見えています。そうした、高齢者とのかわりの中で、先ほど星野さんのご指摘されていたような、やはり、なるべく長くここで住んでいくためには、明日ここに住むことができなくなるような事態を招いてはいけないと肝に銘じて運営しているところで

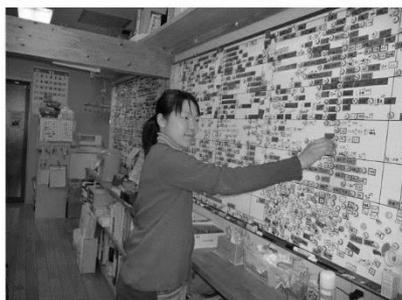
す。

暮らしネット・えんの日々 多機能ホームまどか（まどかで、自宅で）



これは小規模多機能型介護で、自宅に訪問したり、来ていただいて、一緒におやつを作ったりという風景ですね。

暮らしネット・えんの日々 訪問介護スケジュール調整中



これは訪問介護のスケジュール管理をしているところです。2週間分のスケジュール調整をしています。ここがうちの意味「屋台骨」と言いましょうか、最初の事業でもあり、ヘルパーが総数40名、法人全体の職員数が85名弱ですので、半分の事業、規模的にもかなり大きな事業になっています。訪問介護って、とても大事な事業です。その割には、国に大事にされていない事業なんです。現在

3名のえんの森住民が利用されています。

暮らしネット・えんの日々えんの食卓 配食サービス・セントラルキッチン



これが、セントラルキッチンで作っている配食の、ある日のお弁当です。

えんは先ほど見たように、ボランティアグループから始まった由緒正しき「NPO」です

暮らしネット・えんの日々
定期総会・地域に開いた学習会



から、定期総会ですとか、「地域に開いた何とか」っていうのはとても得意でして、コンサートなんかやると、何かほとんど「プロはだし」だというふうに褒められてるんですが、実はうちのスタッフの多くがですね、元「おやおこ劇場」の事務局だったりしまして。PTA、生活クラブ生協の役員、地域の自治会、町内会の役員をしたりとか、様々なことをしているスタッフが集まっていますので、地域の集合体が暮らしネット

ト・えんだというふうに申しあげても、そんなに間違っていないというふうに思っています。

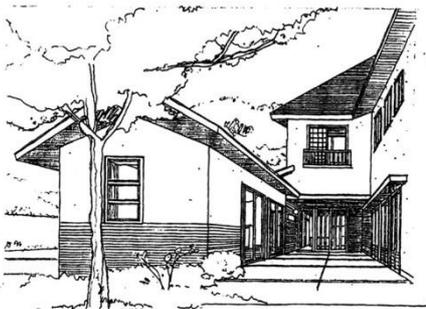
暮らしネット・えんの日々
コンサートや催し物は地域に開いて



これがその、催し物。そして、これ、大分前になりますね。韓流ブームの真っ只中でやりましたら、250人くらい来ちゃったかしら。すごかったですね。お客さんが。訪問介護の利用者さんは、なかなか外へ出られないので、このときには車いすの方でも、どんな方でも、お連れしてドア・トゥ・ドアで楽しんでいただくということで、前の方にはずらっと車いすが並びます。外部の方たちもどっとお見えになって、一緒に

楽しみました。認知症の方たちもたくさんいらっしゃいますので、コンサートの途中には、一緒に歌を口ずさむ方もおられますが、「それが、えんのコンサートなんだよね」と、逆に褒めていただくような環境がこの十数年のあいだにできてきたかなと思っています。

暮らしネット・えんの日々
グループリビングえんの森



これからはグループリビングえんの森の話になります。レジュメにあまり沿っていないんですけども、これは、今日も午後の部でもお話をいただきます、設計者が書いてくださった外面の様子です。今日テーブルや何かを取っ払っちゃったので、いつもの様子を見ていただけなくて残念なんです。とても良い空間になっています。で、ここは、ほぼ夜しか使わないので、「昼

間にも、色んなことに使おうよ」ということで、少しずつ使う機会が増えてきています。また、そのご紹介も午後からしたいと思っています。大きなところでは、「認知症カフェ」ってご存知ですか。オレンジプランの中で、認知症の方たちが一緒に集える場所というのが少ないということと、認知症に対する啓発活動も含めてということで、ここで認知症カフェを始めようと準備を進めています。今、新座市とも協議中です。新座市が何と言っても、私たちは来年度から認知症カフェは始めようというふうに思っています。そのときのボランティアさんはグループリビングの住人さんたちをかなりあてにしていますので、よろしく願いいたします。そういう方たちがここにはお住まいでいらっしゃる。

さて、本題に入りたいと思います。なぜ、グループリビングだったのかというお話を始めます。これは私の私的な話から始めなければなりません。実は私、もう終わって16~17年ぐらいになるんですけど、32歳から、三期のあいだ、無党派の市議員を務めさせていただきました。そのときに、無党派の議員のグループがありまして、そのときの取りまとめをしていたのが、先ほどのお話の中でも、グループリビングの関係者には知らない人がいない、「グループリビングの神様」みたいな存在になってらっしゃる西條節子さんでした。西條さんは非常に有能な、よく先に見える議員さんで、地方議員の中でもぴかーという方で、私はずっと世代が後なので、色んなことを教えていただいて、かわいがっていただきました。今から30年ほど前に、藤沢の遊行寺を会場にしまして、勉強会をしました。そのときも西條さんが取り仕切ってくださいったんですが、夜、お話をしているときに、彼女はずっと独身を通した方で、しかも借家暮らしを通してきて、「私は将来こういう住まい方をしたいの。そういうふうに決めているの」って、そのときの話がグループリビングだったんです、後の。で、それから20年経つか経たないかのときに、もう彼女は着手されていたんです。自分の住まい方、暮らし方というのを、まだ彼女50代になるかならないかな、それぐらいのときからきちんと考えていらっしゃるということにとっても感銘を受けたので、記憶に残っているんだと思います。そして、私もこういう仕事を始めて、暮らしネット・えんを作った頃、「COCO湘南」のことがあちらこちらで報道されたり、テレビに出たりということで、「あら、西條さん、とうとうやったわ」ってということで、お電話をかけました。そうしましたら、「あなたもそういう仕事をしているんだったら、是非作りなさい。とっても良い住まい方よ」というふうに仰ってくださいました。で、その次だったかな、ご連絡を差し上げたときに、「補助金の制度があるから、補助金がなくならいうちに作るといいわよ」と教わりました。その頃はまだ、暮らしネット・えんを始めたばかりで、介護事業の方を充足させることに手一杯で、ようやく小規模多機能ができてしばらく経ったときに、こういうご時世ですから、補助金がなくなることも、そういう恐れもあると思ひまして、まあぼつぼつやっとなかいかねということでも考えました。私的なことと言えば、早く夫が亡くなったりして、ひとり暮らしになっていまして、仕事を持っているからいいんですけども、「仕事を持たないひとり暮らしのさみしさ」というのは分かる気がしたんです。ずっとひとりでご飯食べてね、誰とも口聞かない日が何日ってそれは耐えられないな。元気

なうちは出て行けるけれども、出て行けないけど、まだ元気が残っているのはどうするんだろうと思ったときに、グループリビングという住まい方というところに、私自身のこれからということも重なってきたというところがあります。

で、補助金の問題がそこに重なっていくわけですが、もう 1 つには、グループホームが隣地にありまして、ここの土地が使われない形で空いている。で、将来隣に何か全く関係のないものが建ってしまうと、ちょっと大変かなということもあって、ここを使わせていただけるんだったら、何かここを自分たちでというふうに考えていたということも重なります。そこで、貸していただいたという幸運もあるんですけど。

介護事業全体で見ている、特に在宅の方たちの 1 つのネックになるのが、住まいのバリアフリーでないこと。それがネックになって「施設へ」ということも起きてくるんです。不安定な外階段を上ったアパートなんかに住んでいると、デイサービスにも行かれない。5階の公団で住んでいらして、エレベーターがない所の方たちなんか、デイサービスに行くのに、デイサービスのスタッフにおぶって出て行ってもらうみたいな話がある。そういう住まいの状況の悪さがその方の自立を損なっていく様子を見ました。で、介護保険とかそういう制度だけではどうしようもない、住環境さえ整っていれば、もうちょっと暮らし続けられるという方がたくさんいらっしゃるということも知りました。その一方側で、何を考えているんだかよく分かんない高齢者の住宅政策が相変わらず続いています。今、先ほどから話題に上っています、サービス付き高齢者専用住宅というものは、今、国が推進している住宅でして、「皆さん、これからは在宅で死ぬ世の中にしますよ」って国は言ってるんですが、あの在宅って、皆さんの築 40 年のお家のことではありません。基本的には、サービス付き高齢者住宅のことを言っています。私 1 回その話を、国交省から厚生労働省に出向されている若手の課長補佐にお話を聞く機会がありました。特に認知症の方たちが周りの方たちとうまくいかない。それから、スタッフにとっても処遇困難ケースということで、互いに苦しい思いをしている様子を見ている個別にお部屋というところに入ってしまって、そこで何が起きているか分からない。で、一度サービス付き高齢者向け住宅に入ってしまうと、あんまり近いご家族じゃなかったんで、「最後まで見ます」って言っている施設側の話を聞いてしまって、私たちはとても無理だと思っているんだけど、なかなかその先にいかない。で、転倒、骨折なんか起きてしまう、頻発してしまうとか。「こういう実態あるよ」っていう話をしたら、下向いて帰っちゃったんですけども。やっぱりサービス付き高齢者住宅では問題解決しない。もちろん、ぴったり適応する方もいますが、これから劣悪なサービス付き、「サ付き」と言われるものをどういうふうにしていくのかというのが、大きな政策課題になっていくだろうと思います。こうしたことで、「まあ普通の高齢者住宅政策に則ったものはやりたかないけれども、住宅大事だよな」というふうな思いがありました。

そこで、財団法人 JKA というところが、当時 8000 万円という補助金を付けていたんです。「これは、しめしめ」と思いまして、設計の方ですとか、ここに入りたいという方たち、

うちの理事さん初め、手を挙げてくださった周辺の方たちと検討委員会を始めました。面白かったですね。そこに飛び込んできてくださったのが、先ほどの星野さんで、星野さんすごくて、お互いのために良いところに来てくださったんですけれども、そんなことで、検討委員会を始めて、もう侃々諤々^{かんかんがくがく}。入る気満々の方たちなんで、こちらから言わせると「言いたい放題」、「どこまでお金かけさせる気なの？」ぐらいの話が色々出てきて、そこを押さえながらここに至ったんですが。これ結構難産でして、採択が決まったときだったかな、8割の補助金が、なんとうちだけ3割マイナスの5割になりました。もう一生の恨みです。どこへ行っても、グループリビングのお仲間の所は8割交付で、うちだけ5割交付。3000万違うんです。痛かったですね。この3000万がなかったら、どんなに楽だったろうって、いまだに思っていますけれども、でも、5000万円を逃すわけにはいかないということで、そのまま参りました。その後も色んなことがありながら、ようやく建て始めたら、3.11が起きてしまって、ここは大変地盤がいいようで、隣の事務所の本棚の本でさえ落ちなかったぐらいだから、建築自体が問題ではなかったんですが、資材等が来なくなったりして、止まってしまいました。で、遅延届を出したりして、結局、竣工が7月で、オープンが9月1日ということになりました。で、イレギュラーな形で、検討委員会の方たちの中からお入りになるという方は、早めに入っていて、ここの中の状況を少し色々ね、整えるということもしていただいて、9月1日に正式オープンという形になっています。

それからほぼ2年を過ぎたんですが、私はすぐにいっぱいになるとばかり思っていました。これがなかなかならないんです。最初は結構出足良かったですね。あつという間に7名になりましたね。あの、検討委員会の中から、最終的に5名かな、1、2、3、4、5名が、6名残られたのか、今はね。というぐらいで、歩留まりのいい検討委員会だったようです。他の所は、検討委員会で「私も入りたい」ってやって、散々話をして、出来上がったら「まだ、早いわ」って言って、誰も入りませんでしたっていう話を聞いたこともあるんですが、うちは半分以上入ったということでは、積極的で、本当に願っていた方たちが多かった。ですけれども、その後がなかなかいかない。まあ、ぼちぼちご近所の方のご紹介とかいうことで入られて、で、9名までいきました。「あ、9。あと1」って思っていたら、お一人の方は、「私は有料老人ホームの方がやっぱり適している」って言う。それも有りなんですね、やっぱり。ちょっとがっかりはしましたがけれども、その方の様子を見てみると、もっと目に見える形でのサポートがいつもある方がいい。ここには夜、人いません。昼間も職員は置いていません。そういう形では、不安だったというのはよく分かります。それから、もう一人の方は、一旦外に出てみたら、やっぱり娘と一緒に住みたくなった。で、中での暮らし方ということも、彼女の考え方にも合わなかったのかもしれない。そして、素敵な二世帯住宅を建てられて、その部屋はここと同じように長い形にしました。「ここで学んだことを家の設計に活かしました」と言って、去年ここから退居なされました。で、また減ってしまって、それからしばらく10名にならず、ようやく10名になったのが今年の7月でした。でも、去年だったか一昨年だったかのグループリビングの集まりの所で、「う

ちはまだ9なんですよ」って言ったら、「優秀じゃない」って言われて、よそでもすごく苦
労してるってことを改めて知ったんですけれども、そんな状況でここまで参りました。

そういうことで結構苦労もしましたし、もしかしたら、サービス付きにすれば、もうち
よっと宣伝の方法もあるかとか、色んなことを考えました。迷いました。実際、よそ様よ
り3000万少ないということで、それだけ借金も増えていますので、最初の計算よりもずっ
と厳しい状況で運営しなければならなくなってしまっ。利用者の最初の入居一時金10年
間償却300万円、前家賃みたいなもんです、それをもうちょっと増やしておけばとか思っ
たんですけど、「それ、駄目だ」とJKAさんから言われましてね。増やしておけば、ちょ
っと楽だったかなとか、本当に色んなことを思いました。

入居者の役割とか、問題点、先ほどは星野さん見事にまとめてくださったので、じゃあ
どうするのということと、この間、ここに入るためにお見えになった方たちとのやり取り
の中ではっきりしてきたことがいくつかあります。やはりお聞きになることは、「ここでは
何をしてくださるの？どんな介護をしてくさるの？」「ここで亡くなれますか？ここで死ね
ますか？」、その二点は必ずお聞きになります。他のグループリビングの運営者の方って、
もっと優しく答えていらっしゃるようなんですが、私は木で鼻をくくったような女なもん
ですから、「何をしてあげるといよりも、そちらが何をしてほしいのか仰っていただきた
い。こちらの方から何かを用意するのではなくて、必要なことは出来る限りのものを揃え
ます。で、出来る限りのことを揃えるだけの体制が、うちの法人の中にもあるし、地域の中
にも色んな形で連携できているところがあります。訪問看護もあれば、訪問薬剤もあり、
往診も仲良くしているいくつかの医療施設もあります」とお伝えしています。

もう1つの特徴は、この地域の方がお入りになっていますね。在住・在勤がほとんどで
す。外からっていう方は、お嬢さんがこちらに住んでいて、呼び寄せの方とか、そのぐら
いで、ほぼ8割、10人のうち8人までがここで、新座の在住・在勤の方という状況なので、
自分のかかりつけ医をそのまま持ってきたりしているんですけれども。でも、もし、変え
る必要があったり、往診が必要になったらいつでもできるし、それから、思った以上に色
んな支援が必要な方がお入りになったケースがあるんですが、その方は個別に訪問介護と
契約をいただいて、訪問介護の方が介護保険ではできないようなことを、朝晩必ず見守り
に来るといふうなことをしながらやっています。

あと、例えば小さな細々したこと、電気の球が切れちゃったとか、どうもテレビがつか
ないとかね、色んなトラブルが起きますけど。コンセント抜けてたとかね、そういうこ
ともあるんですけれども、そういうときには事務局が「走れば数秒」という所なものです
から、ここに伺ってということもあります。夜間にお電話がかかることも何回かありまし
た。で、こちらの方の建物の不備で、水漏れが日曜日の朝にしてしまったこともあります。

「あ、いいな」って思ったことがいくつかあります。この前たまたま、自分が出かける
日を間違えてチェックしてしまって、「夕飯に帰ってこない。食べていない。まだいないみ
たい。もしかしたら、お部屋の中で…」ってということで、22時半ごろ私の携帯に電話かか

ってきました、そうしましたら、どうも 1 日間違えて付けてきちゃったということが分かって、外出していらしたと。でも、22 時半に、「隣の部屋の方が帰ってないみたい。帰ってないのか、それとも中でおかしくなっているのか心配なので連絡しました」って、やっぱり、ちょっとした安心ってこれなんだなっていうふうに思います。

それから、今、入院されている方が具合が悪くなられたとき、もちろん訪問介護つけたりしたんですが、いよいよどうもっていうときには、やっぱりこの中の方に助けを求めていらっしゃいます。ご家族やうちの方と連絡を取って、「入院」というふうになったんですが、本当にたった 2 年のあいだに、入居者同士のちょっとした支え合いができていたということが、とても良いなというふうに思っています。

前に、この中のお一人に、最初の冬を越したときに、「ここへ入られて、良いと思われたことは何でしょうか」とお聞きしたら、腰痛が起きてしまって、湿布を貼らなきゃならないんだけど、ここに貼る湿布って、一人じゃ貼れないのね。分かるでしょう？しわしわになっちゃうんですよ。私は仕事場に持ってきて、「ちょっと、ちょっと」って言って、物陰に隠れて、スタッフに貼ってもらうんですね、今は。でも、ひとり暮らしてそれができないし、まさかご近所に行って、「貼ってちょうだいよ」って言うのはなかなか難しい。ところが、ここだと、その方の湿布を貼る当番ができていたようで、夜寝る前にお風呂に入ってから、湿布を貼りに来てくださる。で、その方がお留守になったら、他の方に頼んでいる。何か、「湿布を貼ってもらえる関係」っていうのも、グループリビングの売りには悪くないなっていうふうに思っています。そういうことなのではないか。

ここリビングルームもあんまり使われてないし、昼間来ると静かだし、もうちょっと何かしたらって思うんですけど、「いえ、結構です」って仰るんですね、多くの方が。夜のご飯の時間、1 時間ないしもうちょっと話が弾むときもあるようですけれど、「その時間に人と会える、人と話ができる、それでいいのよ」っていうふうに仰って、ああなるほどっていうふうに思いました。つかず離れずの大変良い関係。困ったなということで、私なんか介入したりすることはもちろんあります。「百パーセントに良い住まい」だなんてことは、どこに生きても有り得ないので、それはまあまあ許容の範囲、「まあまあ良い暮らし」ができていないんじゃないかなって。まあ、それなりに我慢をすることやら、嫌なことももちろんあるようです。私はそこのところは傍目で見ていることにします。本当に大変になったら介入します。

あと、ここで亡くなれるかっていうのは、1 つにはやっぱり利用者さん、入居者さん同士の関係だと思えます。「隣の部屋で、私が亡くなってってもいい？」と言ったときに、「あなたがここで亡くなるんだったら、それはいいよ」って言ってくれる関係性をここで作れるか。だから、早めの住み替え。1 ヶ月前に入ってきて、よく顔も分からない人が、突然「ターミナルです。ここで死なせてください」っていうの、なかなか辛いものがあるだろうと思います。だけど、やっぱり一緒に食卓を囲み、年月をともにしてきた人であれば、COCO 湘南でも経験されたようですけど、「いいんじゃない？私もここで死にたい」ということが

起きてくるのではないか。まだ2年なので、それはここではできていません。もう1つには、訪問介護とか、在宅介護の状況を見ていると、はるかに状況の悪いお住まいで「ひとりで死ぬ」って決めた人は、ひとりで死んでいくんですね。その「ひとりで死んでいく」という覚悟があれば、ここで周りの方たちが「死んでもいいよ」って言うてくれて、亡くなっていくことの方がはるかに楽にできるはずだということを確認しています。

それは、例えば、地域の医療と介護の連携を作ることは私たちの法人が中心になって。「うちのケアマネじゃなくて、外がいい」って言うのは、それもオーケーですし、「訪問介護も他がいい」って言えば、それもオーケーです。色んなことを考えながら、支えていくことは十分にできて、多分うちの法人で在宅のターミナルを看取った何人かの方たちよりも、ここでははるかに、看取る側も看取られる側も穏やかで楽な最期を迎えられる可能性があると思っています。これはやってみないと分かりません。あとご家族ですね。ご家族の覚悟というのにも必要だと思います。そういうことも含めて、まだたった2年の経験ですので、何が出てくるか分かりませんが、何が出てきても、何とかしようというふうに、私と私の仲間たちは思ってくれますよね？（会場のスタッフに問かける）「うん」って言うてますので、大丈夫です。私が「うん」って言うても、あんまりあてにならないです。私が介護するわけではないので。

これからまた、色んなことが起きてくる。一つひとつ起きてきたことに対応しながら、グループリビングという新しい住まい方を作っていきたい。で、いずれ私はここの代表を降り、役員を降り、暮らしネット・えんの悪口を言える立場になったときに、「あそこの食事ってまずいわよね」とかね、「あそこのケアって大したことないのよね」とか言える立場になったときは、ここに入って、最期を迎えられたらいいなと思っております。そのときには、うちは約束事があるって、お入りになりたい方はここへ泊まっていたいただいて、入居者の皆さんがオーケーを出さなきゃ入れてくれないんです。そのときに「嫌だ」って言わないでください。

